

2013



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
1月号
No. 595

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



謹
賀
新
年

平成二十五年 元日





松と寒牡丹

△1頁の花▽ 仙溪

手も凍える寒さの中で、菰に覆われて健気に花色をのぞかせる寒牡丹の赤い花。敢えて厳しい環境に挑むように顔を紅潮させて開こうとする花の気品に触れたくて、貴重な花を切つて松といけた。

自分はこの寒牡丹のように敢えて困難に向かつていつているだろうか。この貴い命をいけるに値する人になつてゐるだろうか。父だったらこの寒牡丹をどんなふうにいけるだろうか。

花材 寒牡丹 松
花器 陶コンポット(宇野仁松作)

南天と白菊

△2頁の花▽ 仙溪

いけるまでは平凡なとり合わせすぎて、「テキスト」の作例になるだろうかと心配していたが、この平凡さがかえつて新鮮な一作となつた。

ただし菊の品種、花器の選択といつたものが別のものだったら、平凡なだけのいけばなになつていたかもしれない。もし別の花器にいつてあつたら、などと想像しながらご覧いただくのも、感覚を磨く一つの方法だと思ふ。

花材 南天 菊
花器 魚耳陶花瓶

△表紙の花▽の解説は10頁。



寒桜の投入

主材 寒桜（薔薇科）

副材 水仙（彼岸花科）

洋菊（アナスタシア・菊科）

いけばなで初冬に「寒桜」の名前でいけているのは「十月桜」もしくは「子福桜」で花は八重。ほかに「冬桜」や「四季桜」などの一重咲きの冬に咲く桜があり、これらは山の斜面を埋め尽くすように咲く名所があるので、一度訪れてみてはいかががるうか。

冬桜の名所では群馬県藤岡市おにし鬼石が有名で七千本が育つ。（テキスト581号でも紹介した。）

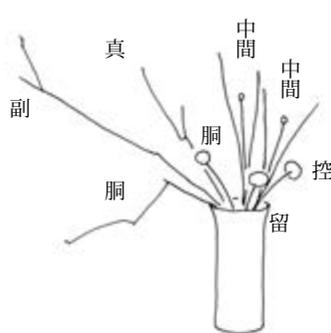
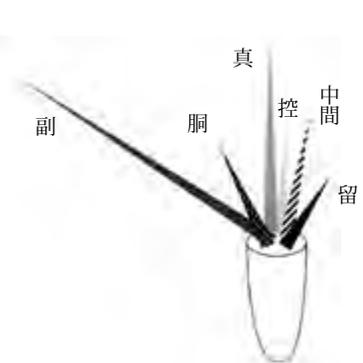
四季桜の名所としては愛知県豊田市小原で一万本の四季桜がいつせいに咲き、紅葉とのコントラストが絶妙だそうだ。

作例の寒桜は「子福桜」だと思っ。枝を広げすぎると寂しくなるので、主になる枝をとめたら、その枝の後に別の枝を重ねる。

季節の花として水仙をとり合わせ、濃赤色の洋菊で水際の茂みと温かな色彩を加えた。

この投入では菊の選択がポイントになっている。アナスタシアという洋菊は秋以外に使っても花がモダンなので違和感がない。また濃い赤色を選ぶことで寒桜の冬枯れた風情にあたたかみを加えることができる。

斜体副主型



横から見たところ



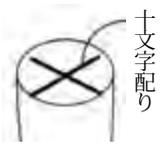


③ 濃赤色の洋菊（アナスタシア）を左前方へ出して、寒桜の足もとを整える。



① 器の口から少し下に竹串で十文字配りをかけておく。

寒桜の主になる枝を斜め横（やや前方）へ伸びてゆくように留める（副の位置）。

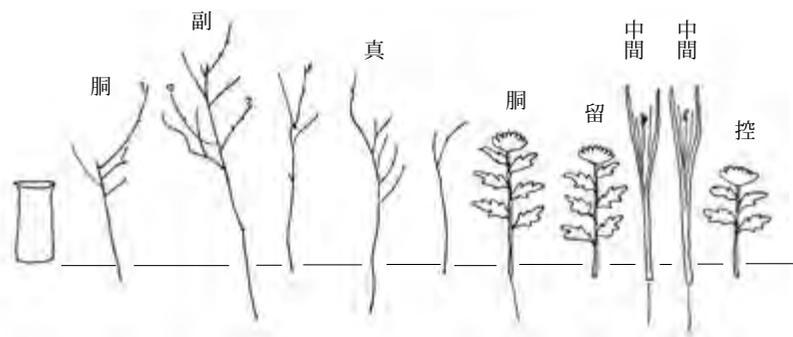


④ 濃赤色の洋菊をさらに二本加えたところ。右前方の留の位置と、右後方の控。

中間の水仙は下から竹串を刺しておき、花器に沈み込まないように入れている。（4頁の花）



② 寒桜の別の枝を主枝の前後に加える。



花器の水際

それぞれの長さ

赤芽柳

仙溪

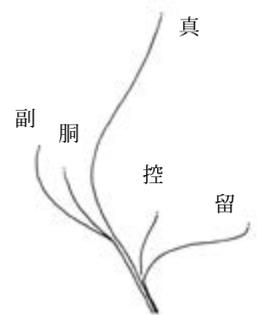
花型 草型 留流し

花器 煤竹竹筒

先月号の行李柳の生花や、この赤芽柳の生花では、生け上がるまでの過程に特別な技術が必要で、その技

術の習得には繰り返し返していけることが大切で、それ以外の近道はない。枝の足もとの冬芽を切りとることにしても最初のうちはなかなかうまく切れないが、何度もいけているうちに、コツがわかってくる。

水際がきゅっと一つに揃うまでには年数がかかるが、何度もいけるうちにすこしずつ技が身につくものだ。根気よく積み重ねることでスキルアップを目指す。



床の間のこと

床の間の花の置き方について基本的なことをまとめてみる。



右の写真は私の家の茶室の床で、床柱の右に床があるので上座床（本勝手かみざとの床）である。床柱の左側に床があれば下座床（逆勝手しもざとの床）になる。



この本勝手の床には本勝手の花を床柱に寄せていけるのが一般的である。（右の若松と椿の生花のように）もともと床には床柱と反対側に書院が付いていて、外の光を障子越しに取り込む明かり口の役目があり、床柱側に花を置いた方が明かりを受ける形になって収まりも良い。

ただし、その逆に明かり口側（上

石化柳 水仙

仙溪

花型 草型 二種挿し
花器 煤竹竹筒
石化柳は尾上柳の園芸品種とされ
ている。篋状に枝が帯化する植物に
はこの石化柳以外にも石化金雀児が

あるが、どちらもいけばなの花材にな
っている。

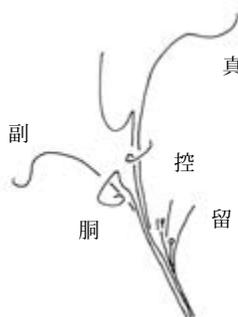
石化した部分は撓められる方向と
撓められない方向があるので、どの
役枝にむいた枝かを考えながら各枝
を組み合わせてみてからいけ進め
る。

石化柳五本で真、真囲、見越、副

胴をつくり、水仙を葉組して留、控
に加えた。

水仙の留は、足もとが水際から広
がってしまいやすいので、水際をい
かに細く寄せられるかがポイントと
なる。

水仙以外なら、椿の留もいい。



座)に花を置き、上座に座った客が
花をゆつくりと観賞できるようにと
の配慮がなされることもある。つま
り先ほどの考え方は逆になる。ま
た現代では明かり口が無かったり幅
の狭い床も多く、花の位置は床の大
きさや花の大きさ、花型によって柔
軟に考えて飾ればいだろう。

右か左かは置いておくとして、床
の間に花を飾る場合の心得を書いて
おこう。

掛物には横物(横軸)と豎物(立
軸)のふたつがあり、横物のときは
掛花か、軸の下(床の中央)に花を
置く。豎物ならば花は脇へ譲って置
くのが基本である。

また掛物に書かれた花をいけるこ
とは避け、人物が描かれていればそ
の顔に枝がかからないように、名や
印を隠さないように注意する。

置花生は畳床には薄板を敷き、板
床ならば直に置く。

「本床」は床柱には面取りした角
材を用い、床框は床柱と共木の漆塗
りで付書院があり、床脇に違い棚が
ある。

床板と畳の上面を揃えた「踏込み
床」、畳より床板の上面を高くした
「蹴込み床」のほか、「琵琶床」、「洞
床」、「袋床」、「釣床」、「置き床」(移
動できる簡易な床)などの様式があ
る。

さらに茶道では掛け軸のほかに香
炉や香合を飾ったときは花入れを置
かない決まりがある。





金彩花器

櫻子

柳原睦夫さんの花器の底は、ピンクと黄色の雲のような構図の中に金彩を走らせてある。その金が手付となって花器の縁にも現れる。

柳原さんの花器は外側、内側、底にも彩色してあって、どの器も情熱的で個性が強い。花をいける時はかなり緊張して花選ひから良く考えねばならない。生け手の事などはあまり考えずに作陶されているのだから。とてもいけにくい器が多い。

しかし一度でも花が上手くいけられたなら、この花器の魅力にとり憑かれてしまう。父も母も仙溪も私も。

花材 カラー(ホットチョコレート)

スイートピー シクラメン



新年の花 〱表紙の花〱 櫻子

お正月の準備のため、暮れに花を買って求めるのだが、明るい色の花がなくて苦労することが多い。

赤い実は南天か千両なので決まったスタイルになってしまふ。今年は梅擬うめもじぎきが遅くまで残ってくれていて有難かった。

梅擬の艶やかで真っ赤な色は見ているだけでも元気になる。

小さな葉を取る作業が大変で手間をかけて出荷されるが、小枝までたっぷりの実をつけて豊かな実りを感じる。粒の大きな大納言という品種をいけているが、良く日持ちする。

水仙、松、椿は緑の葉の色合いがそれぞれに違うので三種取り合わせても清々しい。梅擬の赤色に「富春杯」(この器の名)の朱が綺麗に調和している。

お土産に頂いたルーマニア製の刺繍の敷物が素朴で優しい。

同じとし頃？

〱10頁の花〱 櫻子

洋蘭はとても多くの種類がある。世界中に蘭は3万から3万5千種あると言われている中で人の手によって改良された交配種も沢山作られている。

アマリリスと取り合わせた蘭は、オンシジウム・ワイルドキャットで学名はコルナマラ・ワイルドキャットという。

コルナマラ属はミルトニア属×オドントゲロッサム属×オンシジウム属との属間交配によって生まれた新しい属。



1963年に登録されたという事は同じ年くらいの蘭なのかも。長い歴史を持つ蘭の栽培ではニューフェイス!

人の手によって作られた蘭はこれからも沢山お目にかかるだろう。

アランダやモカラもお稽古でもいける事が多い蘭だが、同じく原産地を知らない。

花材 アマリリス

オンシジウム・ワイルド

キャット

アンズリウム・コーヒー

カップ ミリオクラダス

なごり雪 〓11頁の花〓 櫻子

胡蝶蘭はラン科ファレノプシス属で原産地は東南アジアを中心にインド、台湾、オーストラリア北部などに広がる。

今でも自生地では高い樹木や岩の上しっかりと根を張り着生する蘭で仲間のオンシジウムやバンダ、デンドロビウムも野生では過酷な環境であっても人の手など一切必要とせず毎年時期がくれば自然に開化する。

そんな高貴な花は育てるのは難しい。花を咲かせるのは困難だとわかっているので、毎年新種が出ると驚きで魅入ってしまう。

「なごり雪」は花の大きさが3cmほどの小さな胡蝶蘭だ。寒さに強いのでこの名前になったとの事。

大好きだった歌と同じ名前で、早速赤いワイングラスに葉牡丹といけて新年の食卓に飾った。



マユハケオモト 仙溪

眉刷毛万年青は南アフリカ原産で、彼岸花科ハエマンサス属の常緑多年草。花の姿を眉刷毛に見立ててこの名前がついた。

鉢植えから根っこごと抜いて土を洗い落とすと、球根状の鱗茎と太い根が残るので、そのまま器にいけることで長い間いけて鑑賞することができる。そのままと転んでしまうので、剣山に棒を立てておき、針金で倒れないように固定している。

陶器の大きな片口に水を少なめに入れ、眉刷毛万年青を二株とめてから千両を短く挿し加えた。

幅の広い肉厚の葉はおおらかな美しさがあり、不思議な花をつけた太い花茎ともに見えていて見飽きない。これほど茎の立派なものも珍しいので、横へ出た花を生かす横長の花型にして、横長の塗りのお盆に片側に寄せて飾ってみた。

漆器には上質の品格が備わっている。漆が何度も塗り重ねられた器には、時間と手間を惜しまない物作りの魂が宿っているように思う。少しずつの積み重ねを大切に、心をこめてやり続けてこそ得られるもの。そんな心のこもった物を、物も心も大切にしながら使うことが豊かさではないかと最近思うようになった。

物に宿る心を感じ取れる、豊かな心が持てるように、精進したい。

訃報

12月18日、午前7時22分。父桑原仙齋が85才で他界いたしました。

通夜と密葬は近親者のみで営ませていただき、本葬は1月19日(土)午後2時より、京都市上京区寺町通広小路上ルの廬山寺にてさせていただきますことになりました。

本葬の際、ご供花はご辞退させていただきます。

生前のご厚誼に感謝申し上げますとともに、謹んでお知らせ申し上げます

桑原 仙溪

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
2月号
No. 596

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



母のもとへ

昨年、十二月十八日に亡くなりました父仙齋の本葬は、一月十九日に廬山寺にて執り行いましたが、大変お寒い中を大勢の皆様にご参列を賜り、厚く御礼を申し上げます。

父は昨年五月下旬に大動脈瘤の手術の為に入院の後、肺炎によって入院が長引くなかで最期は腎不全が原因で亡くなりました。八十五才でした。

入院中は本人もかなり辛い思いをしましたので、きつと母が「もうこっちにきて」と、父を呼んだのだと思います。今頃はどこかの星で、母と再会し、仲良く話に花を咲かせているでしょう。

父のいける花には、何とも云



えない不思議な魅力がありました。色彩にこだわりがあり、ときに繊細で、かつ非常に強い父のいけばな。私は父のような不思議な魅力が出せるところにはまだまだ至りませんが、花をいける心の手がかりは、しっかりと手渡してもらいました。

父が目指したものを引き継ぎ、私達家族、そして桑原専慶流一門の皆さんと共に、いけばな文化の向上と、より良い社会をつくるために力を合わせてまいりますので、今までと変わらぬおつきあいを賜りますよう、お願いを申し上げます。

桑原仙溪

本葬で芦田一馬先生に賜ったご弔辞を、先生のお許しを得てここに掲載させていただきます。

弔辞

遠州流宗家

貞松齋 芦田一馬様

故桑原仙齋先生の御霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

仙齋先生、そうお呼びするよりは私には隆吉先生、いや隆吉さんとお呼びする方が一番親しみを感ずる呼び方です。

貴方と初めて出会ったのはそれはもう五十年近くの昔、私が遠州流の宗家を継承するにあたり、初代の京都いけばな協会会長をつとめられていたご尊父専溪先生にご挨拶に上がった日、貴方は門前で何かご用をなさっていました。

それ以来の永い長いおつきあいでした。

まだ家元でなかつた隆吉先生も若く、私もより若い時代、京都、大阪の先生共々、古典いけばな勉強会を立ち上げ、ご尊父専溪先生のご指導を受けたことも今では懐かしい思い出です。

懐かしいと云えばよく呑みましたね。呑んだと云うよりは、美味しい肴でチビイチビイと飲んだ想い出はありません。酒豪を通り越して貴方の呑みっぷりは正気を少しばかりはずれ、日本酒でも洋酒でもコップに一杯ついで一気、私も負けずに飲み、酔った勢いで店の駐車場まで相撲をとり二人そろっておでこを擦り剥き、又、次の呑み屋にと。

私が元気な時は貴方を背負い、愛妻素子さんの待つ自宅まで送るのです

が、入口までに階段があり、何故か最後の一段がやや高く、いつもそこでけつまずきそうになりながら、入口までたどり着くと、そこには「又お前が飲ましたな」と私を見つめる素子夫人の姿がありました。

そんな隆吉さんは当然の結果のように胃潰瘍をわずらい、治療入院となり、退院後の貴方はあびるほど呑んでいた酒をビタとやめ、以来どんな宴席でも一口たりと口にすることはなくなりました。全く強い意思でした。

そんな反面、貴方は若い時から花をこよなく愛し、いけばなの道を追求され、関西グループという研究グループに属され、私も阿吽の会というグループで若い先生方といけばなの勉強を続けました。

(財) 日本いけばな芸術協会でお互い理事と云う立場、いけばな文化の普及発展に微力をつくし、又京都いけばな協会では華道京展の運営に携わり、先代専溪先生に続き七代会長の任につかれ、数多くの協会事業の先頭に立って活動されました。

又ひろく海外にも目を向け、イケバナインターナショナルの京都での世界大会もデモンストレーションをはじめ大活躍。自らも海外に出かけ、世界各国でいけばな文化の紹介、普及に努められ、中でもドイツには毎年のように流門葉と共にいけばなの指導に行かれ、その努力は現家元に受け継がれてきております。

家元を和則先生にゆずられた貴方は

愛妻素子さんに先立たれ、口には云えぬ淋しさであった事と思われず。

それでも貴方はいけばなの研究をおこたる事はなく、お送りいただく流誌に花材の事、器の事、又自然に対する種々の想いを掲載され、その博学ふりは私を感動させて毎号楽しみにしておりました。

京都や大阪での花展にお孫さんと共に見に来られる貴方と控室でお話出来ることを、楽しみ喜びにしております。それに、昨年の京展で終わってしまいました。残念、残念、たまりません。両切りの「カンピー」を手元から離さず、イキナツイードの洋服。カッコいい帽子、靴まで、慶応ボーイの貴方は華道界ではカッコ良すぎでした。

現家元仙溪先生は今は日本いけばな芸術協会の理事であり、京都いけばな協会の副会長をつとめ、いけばな以外にも料理の分野でご活躍の櫻子さん共々大活躍。又家元を支える多くの流門人の皆様方、皆、皆に愛された仙齋先生、隆吉さんとの別れは口には云えぬ悲しみと寂しさで一杯です。

いけばな作品のように限られた時間の中を自由に楽しく又厳しく生きてこられた先生。天国で素子夫人と美味しい料理を食べ、花について語り合っていることでしょうか。眼鏡の奥でにつこり笑い、よおつと手を差し伸べる貴方の姿を忘れることはありません。仙齋先生、隆吉先生。心よりご冥福をお祈りして、お別れの言葉といたします。



△表紙の花▽

青麦 ポピー 晩白釉 蜜柑

△3頁の花▽

青文字 チューリップ

解説は9・10頁



球根のまま

主材 雲龍梅(薔薇科)
副材 喇叭水仙(彼岸花科)
椿(椿科)

花屋で小型の喇叭水仙の鉢植えを見つけたので一鉢買って帰り、球根ごと鉢から抜いて土を洗い落とし、そのまま剣山にさしとめていけてみた。

切り花ではここまで小さな喇叭水仙は売られていない。鉢植えの花には切り花にはない自然味があるので、ときどき買っていけているが、この喇叭水仙のように、鉢から花を切っていけると短すぎでいけにくい場合などに、根ごと、球根ごといけるという選択もあっていい。

こういう使い方を「根洗い」と呼んでいる。

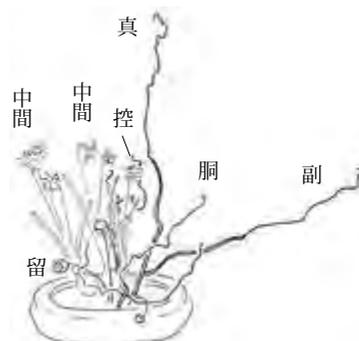
このいけばなのもともとの発想は、中国の正月に飾られる球根水仙を思い出して、球根ごと景色花として使ってみたくなった。

ところが、いざいけてみると、球根の部分はまともに見えない方が良さそうなので、椿の葉で隠すことにした。

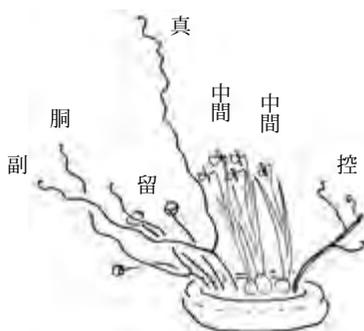
とり合わせた雲龍梅は喇叭水仙に合わせて短めに切り、竜のような枝姿がはつきりと見えるような場所に出している。雲龍梅はとも香りがいいので、咲くのが楽しみである。

盛花斜体副主型

(逆勝手)



横から見たところ

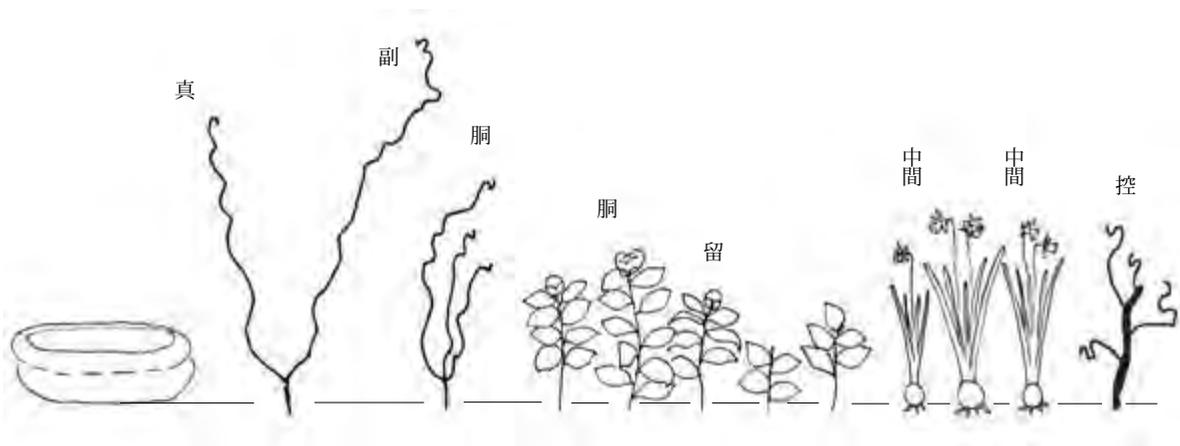




① 喇叭水仙をいける空間をイメージしながら、雲龍梅を剣山にとめてゆく。
 枝分かれを切りはなすと自然味がなくなるので、真と副の位置に工夫してとめている。足もとの太い幹にも小枝に花の蕾がついていたので、後方へ挿し加えた。



② 喇叭水仙を鉢から球根ごと抜いて、バケツの水で土を洗い落としておく。
 球根を剣山に少しさしてとめてゆく。
 足もとに椿を加えると水際がおちつく。(4頁の花)



それぞれの長さ

花器の水際



ビル街の中心に 花の山居

いけばな桑原専慶流は江戸初期の元禄期。立花の名手とうたわれた桑原富春軒仙溪を流祖として、300年の伝統をつなぐ華道の家元。本拠（邸宅）のある界隈は銀行や百貨店、ホテルなどの大型ビルが林立するオフィス街で、家元のある六角通は呉服などの余偏ビジネスの町である。その中でおよそ半間ほどの格子戸の横に「桑原専慶流」の表札を掲げる家元の控えめさがいつそ深い佇まいである。

格子戸の内側は清らかに水打ちされた石畳の露地が30メートルほど延び、そのアプローチに促されて左に折れると光が差し込む坪庭。花の養生のための水溜めがあり、二輪の清楚な花が浮かぶ。訪れる人を迎えてくれる花である。さらに奥へ進むと、また庭がある。小ぶりながら手入れの行き届いた清浄な茶庭が風を運ぶ。元、おくどさん（かまど）のある台所だったという玄関から座敷に上がると、縁側越しに緑が目飛びこむ。いったい、いくつ庭があるのかと思うほどこの家は小さな自然に囲まれ、ビルの真ん中とは思えない静けさで、“つば中の天”とか“市中の山居”とも言える風雅な別天地である。磨きこまれた美しい町家の随所に、その場に合った花たちがさり気なく生けられ、少し、禁欲的な京の町家に文字通りの花を添えている。侘びた茶の湯の山居というよりは、明るく花の山居である。

「庭でも家でも、日々目を注ぐことが大切です。こんな小さな庭でも季節になれば芽を吹き、100年経った家でも細やかに掃除をしていけば傷んだ所にも目が届きます。母の口癖ですが、悪くなってからではあかん。早め早めの手当が草木でも家でも、もちろん人でも必要なやと…」と櫻子さん。

自然だけでなく、家や人にも注がれるその思いは、いけばななどのような関わりがあるのだろうか。

花を生けることは 花を生かすこと

「花ってお料理と通じるところがあると思う」と櫻子さん。野菜であれ、魚であれ、自然から頂戴するものの扱い方の共通点だと言うのだ。

「お花のお稽古に来る方々にもよくお話しするのですが、どうか、花を生けようと思わないでくださいと。上手く生けようとする前に、その花の生い立ちとか、文化的な背景なども考えて、花を生かしてくださいと言っています」。

これは、当家元の創始者・桑原富春軒仙溪が著した「立花時勢粧」以来の桑原家の家訓ともいえる理念で、植物の出生や生い立ちを深く観察することで花や木の自然の姿を思い描き、それをいけばなに取り入れ、花を生かすというもの。櫻子さんはそれを「花と話をし、心通わせ、花に学ぶこと」と言う。なるほど、これは料理と通じる。そして、この美しい住まいもまた、その教えを代々伝えてきた家であればこそ、柱にも壁にも温かい目が注がれているのがよく分かる。

桑原 櫻子

桑原専慶流副家元



紅葉も散り果て、花も枯れる冬。
そんな季節であればこそ、
草木は健気な営みを見せる。
華道家であり、料理研究家でもある
「いけばな 桑原専慶流」の副家元 桑原櫻子さんに
冬の京都の魅力についてうかがいました。

明日のために日々「備え」を続ける自然。 その営みに気づくことも、いけばなの魅力。

○くわはら・さくらこ＝1960年京都市生まれ。両親は華道桑原専慶流の14世家元夫妻。祖父にいけばなの指導を受け、21歳で副家元を襲名し、古典いけばなの生花、立花を今に伝える。国内外で精力的に活動。京都の家庭料理に関する著作やテレビ番組講師なども知られる。

ところで、華道の副家元としてだけでなく、料理と花のサロン「チェリー・キッチン」を主宰する櫻子さんは料理研究家の顔も併せ持つ。

「花と同じように、貴重な自然の恵みを調理する時は、その素材の生い立ちを考えて、季節感のない食材やインスタント食品などとはなるべく組み合わせないよう心がけています。華道家として花の命を生かすことと料理研究家として素材の味(命)を生かすことはまったく同じ」と言う。

人をもてなす花や料理の専門家である櫻子さんは、花や野菜などの素材だけでなく、その優しいまなざしを人にも注ぎ、京言葉で言う“はんなり”、(花のある)人柄とも相まって、心む魅力的な京女である。

ね、って感じですよ」と櫻子さんは言う。冬の御所に落ちている松ぼっくりや黄金色の銀杏の葉を「頂戴するのも楽しみ」と笑う。

「ほかには、嵐山の渡月橋から見る大堰川、三条大橋から鴨川の向こうに望む北山など、大きな風景を見るのも好き」だとも。

「わが家の庭をよく観察していると、小さいながら懸命に生きている自然の営みがよく分かります。とりわけ冬は、花も実もないように見えますが、すでに花芽をつけ始めているのです。開花の準備をしているのですね。人も自然のこういう営みに学ばなければいけないと思います。何ごとにも“備える”という日本人ならではの

真面目さや細やかな感覚も、実は先人たちがきちんと営みを繰り返している自然から学んできたのではないのでしょうか。“備えあれば、憂いなし”ということわざがありますが、それは災害だけでなく、家事でも仕事でも勉強でもすべてに通じる心構えだと思っています。何でも簡単で便利になった現代人は、それを忘れてしまったようですが、自然の方がちゃんと覚えているし、きちんと備えたものには成果が現れることも知っているのですね。いけばなや料理などの私の仕事でもきちんと段取りをしたものは、美しく、おいしく仕上がります”。

いけばなを通じて身につけた、桑原櫻子さんの自然観と生活感である。

冬の自然が教えてくれる 花の生け方

6歳からいけばなを始め、自然の命を尊ぶ家風を身につけた櫻子さんにとって、すべてが寂び枯れていく冬という季節はどのように映るのだろうか。

「華道家にとって冬は、とても勉強になる季節なんです。花も葉も落ち、幹と枝だけになった木はいわば、その木本来の姿。どのように枝を広げているのかがよく見える季節です。私どもの流派の生花も、じつと自然を観察して出来た型なのです。その意味で、松や銀杏、蝋梅、梅や桜も風格ある大木の多い「京都御苑」は私の勉強場所。ああ、こういうふうに見えるの



いけばなの大事なことをお話しておりますので、転載させていただきました。



雪柳 チューリップ

花型 二瓶飾り

花器 主瓶 煤竹竹筒

副瓶 結晶釉小型水盤

春の生花二瓶飾りの作例。

雪柳は折れやすいので、もともとの枝の湾曲を生かすようにする。

いけたのが一月なので細枝で形をつくるのに苦労したが、太枝にたつぷりと花のついた雪柳を見つけていければいけやすい。

その場合、花屋で枝を選ばせてもらえるなら、上方でよく曲がつた枝を、右向き左向きを組み合わせて買うといけやすい。

チューリップはできれば小型の、葉がしつかりしたものを選びたい。葉が柔らかいと、生花にはいけられない。





上の写真は3頁の花を右横からみたところ。
 青文字の花の蕾を集めるために、前方へ枝を傾けて出している。
 青文字の枝の見所を花器よりも前にもってゆくことで、花型に
 奥行きを与え、チューリップの空間を大きく空けている。

花のおくゆき (3頁の花)

- 真・副 南天
- 請・流枝 臘梅
- 正真 水仙
- 見越 苔木
- 控枝・胴・前置 松
- あしらい 椿ほか

南天真の立花 仙溪
 年末年始に京都駅前飾った立花。強風で向きが変わって困った。途中で黒いテープで花器を敷板に固定し、以後は動かず。野外は大変だが好評だったそうで、京都ならではの。





似たもの同士で

△表紙の花▽ 櫻子

毎年飾らせて頂く晩白柚ばんぱくゆず。ザボンの仲間だが、大きいものは5kgほどあり重さも世界一らしい。厚い皮に包まれているので中身の果肉もいつまでも瑞々しいし、長く鑑賞しても最後まで美味しくいただける。熊本・八代市から届いた本当に有り難い果物。一月に干支の置物と晩白柚を飾り静かに新年を迎えさせて頂いた。

このテキストにはポピーと青麦、蜜柑を取り合わせた。みんな真ん丸で可愛いらしい。早春の彩りと香り。同じ部屋なのに、急にはっと明るくなった。

花材 晩白柚(蜜柑科)

蜜柑(蜜柑科)

ポピー(罂粟科)

青麦(稲科)

花器 長方形陶水盤

花曜会

△3頁の花▽ 仙溪

毎月一回の花曜会は、いけない花をいける自由花の研究会。八年前に母が亡くなった翌月から、父は指導側ではなく、自分も一作花をいけてくれた。何をどんなふうにいけていたか、手元に記録を残してある。昨年一月には濃紺の深鉢に青文字をかため、薄紫のスカビオサと黄色のスペリーの糸菊をのぞかせている。「ちょっと色がぼけたかな」と云っていたが、その時の青文字の扱いは鮮明に覚えている。追憶の花。



花材 青文字 (楠科)

チューリップ (百合科)

花器 緑釉深鉢

エゾノキヌヤナギ

△10頁の花▽ 櫻子

この蝦夷の絹柳は、まだ寒い間にすでに芽鱗片を脱いで花穂が膨らんだ状態で花屋にでてくる。温かそうな可愛らしい花穂なので、春の明るい色彩をとり合わせたくなってしまう。つい撫でたくなるような花穂だが、頬にあててみるととても気持ちがいい。見ても触れても癒される。

花材 蝦夷の絹柳 (柳科)

ヴァンダ (蘭科)

菜の花 (油菜科)

花器 陶水盤

ヒヤシンス

△11頁の花▽ 仙溪

ヒヤシンスを球根のままですべていける。ヒヤシンスは地中海東部の原産だが、地中海沿岸は夏に雨が少なく冬に雨が多い冬雨型の気候なので、夏の間は球根で休眠し、秋から春の間に生育、開花する植物が多い。例えば水仙、チューリップ、シクラメンなども同じく地中海沿岸に分布している。

ヒヤシンスは丈が短いので、デンファレとの二種いけにして、花を目立たせた。

花材 ヒヤシンス (百合科)

デンファレ (蘭科)

花器 濃紺ガラス花器



雛の花 桜子

お雛様の横に飾るいけばなは桃と相場が決まっているが、桃のかわりにいけるなら、スイートピーなんかもよく似合う。白色を男雛、ピンク色を女雛のイメージでいけ、葉の緑色とポイントとしての赤色にチューリップを加えた。他には青麦も何故だかよく似合う。どんな花が似合うか、いろいろ試してみよう。

「仙齋彩歳」

「ホッホチャンとケンチャン」はテキストの裏表紙に連載していた工作花を一冊の本にまとめたものだ。毎回工夫された母の花に、父が絶妙の文章を添えていた。

母が亡くなった翌月から、父はテキストに「仙齋彩歳」の連載を始めた。この八年間に約九十の「仙齋彩歳」が掲載されたが、父の文章のファンという人も多く、一冊の本にまとめることにした。

読み返していただくと、父がどんなふうにごっこしていたか、どんなことを考えて花をいけていたか、その手がかりを感じることが出来るはずである。

忌明けに間に合わせるため、各号に個別のタイトルをつける余裕がなかったので、掲載年月とテキスト号数をタイトルにし、父のいけばなとスナップ写真も加えて編集した。

父のメッセージが詰まった一冊。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
3月号
No. 597

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





枝を前へ

△表紙の花▽ 仙溪

早春、また雪の降る寒い時期に満作は咲く。黄色の細い花弁がクシャクシャと丸く集まったような花。不思議な花である。花満作の名前で花屋で売られるものは、花が大きくて香りの強い支那満作の仲間だそう。表紙でいけた満作は、よく見ると花の色と大きさが違う二種類を混ぜていけている。

満作の花を目立たせたかったので、右前方に長い枝を三本集めている。2月号の青文字の盛花と同じような前方へ枝を出す花型である。

満作で水際をつくり、その後ろにアマリリスの花と葉を覗かせた。アマリリスは葉で花の茎をある程度隠すようにするといいい。

花材 花満作（満作科）

アマリリス（彼岸花科）

花器 白色釉陶深鉢

弾むように

△2頁の花▽ 櫻子

白い手毬のような花が弾むように並んでいる。弧を描いて垂れ下がる小手毬の枝は、優雅な空間をつくりだす。長めに使って小手毬がつくる空間の内側に花を入れるのも面白いのだが、飾る場所が大きい場合は枝を短く切り分けて、足もとを少し撓めながら花瓶に投入にすると、



花がきゅと集まって豪華な感じになる。

噴水のように入れた小手毬の動きに添わせるように、紫の濃淡のスイートピーを入れると花が弾み出てくるようだ。この優しい色の広がり、シンビジュームをアクセントに加えた。小手毬の葉の緑も重要な要素になっている。

花材 小手毬（薔薇科）

シンビジューム（蘭科）

スイートピー二種（豆科）

花器 青色細口陶花瓶

伸び上がる

△3頁の花▽ 櫻子

三種類の薔薇をいけたくてあれこれと考えていたが、ビバーナムの濃青色の実をみつけたので、とりあわせてみた。ところが実の色が暗いため薔薇の鮮やかさが沈んでしまう。そこで白のカラーを加えることにした。清楚な白い花とみずみずしい緑色の茎が爽やかで、全体が明るくなった。

カラーの茎の線をどこから見てもそろっているように立てると、力強く上に伸び上がる勢いが生まれる。線をそろえるためには茎の曲がりを実直ぐになおす技術が必要だが、他の花材では出せない魅力がある。

花材 カラー（里芋科）

薔薇三種（薔薇科）

ビバーナムの実（忍冬科）

花器 四足陶花器



啓翁桜

花型 草型 副流し
花器 青銅薄端

先月号のテキストに櫻子の新聞記事を転載したが、その中に冬の木々はすでに春の芽吹きに「備え」て準備をしているということが書かれている。その上で「何でも簡単で便利になった現代人は、それを（備えが大切なことを）忘れてしまったようですが、自然の方がちゃんと覚えていて、きちんと備えたものには成果が現れることも知っているのですね。いけばなや料理などの私の仕事でもきちんと段取りをしたものは、美しく、おいしく仕上がります」と云っている。

まことにその通りだと思ふ。
今年も桜の季節が近づいてきた。鴨川の染井吉野の花芽が膨らんで、薄紅色の蕾が顔を出すのももうじきだ。春はもうそこまできています。

啓翁桜の生花を薄端にかけた。薄端は水面を広く見せることができるので、生花の水際立った美しさがより引き立って見える。





③ 真の枝を入れる。真の分かれ枝を撓めて真囲いや見越にしている。



① 副流しの副には横へ伸び出た枝を選ぶ。副の出口までの足もとは真っ直ぐにしておく。枝先は左手前へ振り出す。



④ 留を入れる前に、くさび撓めをした太めの幹を入れたところ。この幹のうしろから総囲い、留、留の沈み、控の沈み、控の順に入れ、横配りで留める。(4頁の花)



② 副のとなりに銅を入れる。銅の枝先は前方へ。銅のうしろに副の沈み、銅の沈みを入れる。



又木配りをかけたところ



健一郎の木瓜の生花

花型 草型 副流し
花器 竜手附青銅器

一月十九日、廬山寺での父の葬儀には、祭壇の前に私の松の立花と、健一郎の木瓜の生花を供えた。木瓜には棘があるので本来は避けるべきところだが、父は健ちゃんの木瓜の生花がとて好きだったので、棘など気にせず喜んでくれたのではないかと思っている。

この頁の生花がその時の木瓜の生花である。葬儀の前日の夜、私と二人でいけたのだが、私の立花も健ちゃんが手伝ってくれた。師範の竹中慶恒さんと一緒に松葉を掃除したり、合釘で枝をつけたり。今までは父の助手をつとめてきた私が、今度は私が健ちゃんを助手にする日が来たのだ。父も母も天国から見えていたような気がする。「おー健ちゃん、やっとなるやっとなる」そんな嬉しそうな声が聞こえる。



仙溪の松の立花

花型 行型

花器 青銅立花瓶

左の写真は今年の「冬の旅・京都名流いけばな展」の花だが、これは廬山寺での父の葬儀で祭壇の前に備えた私の松の立花を手直しして、父の花として出品させていただいたものである。

とり合わせは

松……真・副・請・流枝・前置

水仙……正真

白梅……控枝・胴

晒木……見越

寒菊……胴

紅椿……あしらい

となっている。

この立花瓶は父が大切にしていた器の一つで、広い水面からすくと立つ水際が美しく見える器である。今後もここ一番という立花を立てる時に、大切に使用したいと思っている。

京の冬の旅

京都名流いけばな展

1/29〜2/3

京都駅新幹線コンコース

桑原仙齋（写真①）

松 梅 水仙 椿 晒木の立花

松本慶季（写真②）

紅梅・水仙・白椿・苔木



生花の器

「薄端」
うすばた

四頁の啓翁桜の生花に青銅の薄端を使ったので、薄端花器について紹介する。

「薄端」を大群林で調べると、

①銅拍子口花瓶の縁が水平に大きく開いたもの。

②瓶形の胴に、中央に生け口があり縁が水平に大きく開いた上皿を入れるもの。重ね薄端となつている。

どじょうし

銅拍子というのは打楽器の一つで、中央が椀状に突起した青銅製の円盤二個を両手に持って打ち合わせるもの。廬山寺での父の葬儀でも説經の間に銅拍子（仏教儀式では鏡鉢という）を鳴らしておられたが、西洋のシンバルに似ている。

①の解釈では口の広い立花瓶も薄端と呼んでいい。七頁の立花に使っているような器がそれである。

②の説明は重ね薄端のことである。四頁に使った薄端がそれで、下の写真のように上下が分かれている。水は皿の部分だけに入れて使う。この龍の手のついた胴の部分は、皿の部分を使わずに単独で使うこともできるよつになつている。胴の前後には翁と鳥の装飾があり、足は五本になつている。

いささか装飾的すぎる感じがするので父はあまり好んで使わなかつた

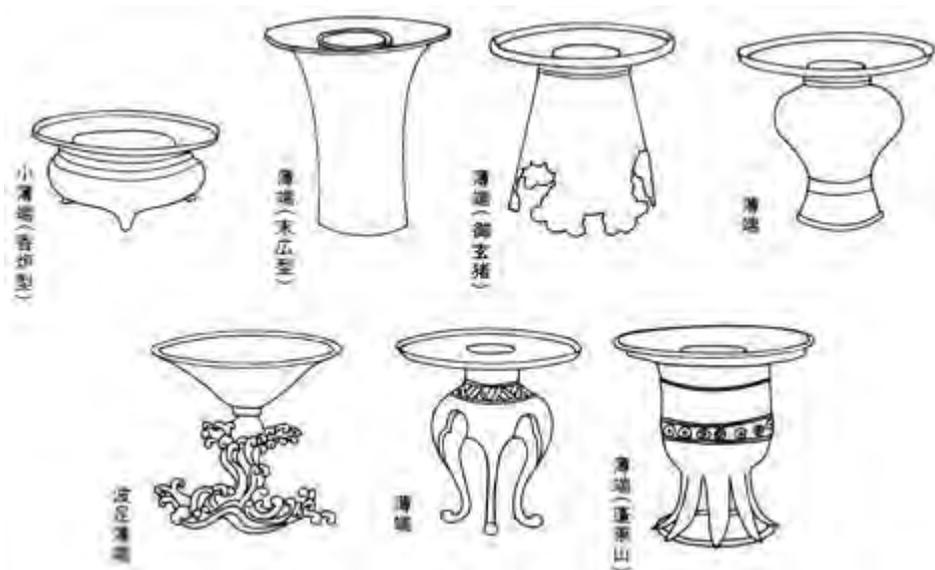


が、生花をいけるために考案された器なので、いけてみると独特の緊張感が生まれる。流儀によっては水を少ししか入れないところもあるよつだが、広い盤面いっぽいの水から立ち上がる美しさを楽しみたい。

薄端は流儀の作風や時代の好みを強く反映して、龍耳、獅子耳、波足、亀足、朝顔、蓮など、耳や足や口造りの意匠にさまざまな工夫がなされている。

左の図は薄端の代表的な形である。なかでも「御玄猪」は池坊四十一世専明が考案したもので、宮中に献上される亥の子餅（玄猪餅）が丸三宝の上に載せられていたのをもとにして考案した薄端である。

各流儀の家元の好みの薄端が創案されていて、御玄猪のほかにも、末広型（松月堂主古流）、香炉型（遠州）などは流儀専用の薄端花器といえる。（参考：『伝承のいけばな 生花』主婦の友社 図は同書より転載）





立てる・広げる・隠す

仙溪

「カルノシャルロット」という。この頁の大輪の花の名前だが、ランキュラスの一品種だそう。なんとも美しい花である。

見ていると自由に伸ばしてあげたくなつたので、赤いガラス花瓶に投入にすることにした。とり合わせる花を悩んでいると、櫻子が別の花屋で買ってきた濃赤色のチューリップを使つていいよ、ということ。チューリップを後方に立てて、ランキュラスを前方へ広げていけ、足もとをアンズリウムの小葉で隠した。

チューリップとランキュラスと花器。それぞれの赤色が互いの色合いを強めている。そこにアンズリウムの動きのある葉が加わることで、ぐっと景色が面白くなった。

立てる、広げる、隠す。それぞれの花材に役割をもたせて、自然体でいけているが、色合いも、とり合わせも、花型も気に入っている。偶然の出会いから生まれた花だが、この雰囲気覚えておこう。

花材 ランキュラス(金鳳花科)

チューリップ(百合科)

アンズリウムの葉(里芋科)

花器 赤色ガラス花瓶



盛花と投入

仙溪

剣山にさしていける盛花と、花器にもたせかけていける投入は、いけている時の感触が微妙に違う。

いけばなを習い始めのころは花器に留めにくい投入よりも、角度や向きを思いのままいけられる盛花のほうがいけやすい。投入で枝や花を形良くいけるのには、経験を積まないと身につかない「勘」が必要になるが、この勘が身につき始めると投入の楽しさに気付くことになる。

枝をある程度自由にとめられるようになってきて、今は「手を離す」ことを楽しんでいける。枝に必要な仕掛けをして花器に入れてみる。その時に器と枝が偶然にどんな空間をつくってくれるか。主導権を枝にあずけるような気持ちで「手を離す」のである。その時にいい表情を見せてくれるかどうかは、こちらの技量次第ともいえる。仕掛けがなかなかうまくできずにもたもたと枝をいじっていると、枝もくたびれてしまう。是非とも数多くいけて経験を積み、「手を離す」楽しさを味わってほしい。

自然体で

△10頁の花▽

仙溪

今月のテキストにはシンビジウムを二種使っている。二頁の直立型・臙脂色・小型と、この頁のキャスケード型（下垂型）・淡緑白色・大型。二頁のは切り花で、この頁のは鉢植から切っつけていけている。



キャスケード型のシンビジウムは立ち上がった茎が途中で曲がり、その先に花が沢山ついているので背の高い器に投入するのが自然なわけ方だろう。作例に使ったのは一本だが、花器に入れただけでもかなり存在感がある。あとはシンビジウムと原産地の近いグロリオサを二本添えて、自然体の投入にした。

花材 シンビジウム(蘭科)

グロリオサ(百合科)

花器 青色釉陶花瓶

立てる・集める・隠す

△11頁の花▽ 桜子

9頁の家元の投入が「立てる・広げる・隠す」いけばなであるのに対して、「立てる集める・隠す」を意識していた花。ライラックは切り花では水揚げの悪い花で、いける時には必ず足もとの皮を削っておく。そのようにした上で作例のように短く集めていけると、一旦水が揚がれば結構長持ちする。色を集めるように使うのに向いた花材だと思う。

カーネーションとライラックだけではふわふわした感じになるので、引き締め役にシーグレープの色づいた葉を加えた。

花材 カーネーション(撫子科)

ライラック(木犀科)

シーグレープ(蓼科)

花器 濃紺ガラス花器



二種でいける 櫻子

今月のテキストには七作の投入盛花があるが、そのうち四作が三種類の花材でいけられていて、のこり三作は二種類の花材でいけられている。それぞれを見直すと、なるほど三種でいけられた花はそれぞれに役割があつて、二種では物足りない。それは面としての葉であつたり、季節感を加えるためのワンポイントとしての実であつたりしている。

いけばなは花材の種類が多くなるほどそれぞれ個性が薄れていく。とり合わせを考える時は、互いの個性が際立つような組み合わせを大事にしたい。もし二種で納得のいく組み合わせをみついたら、余計なものを入れずに花型を工夫することで充分見応えのあるいけばなになる。

青いガラス器の上に雪柳の枝を四方へ広げておいてその中にアネモネをさしてゆく。

春を告げてくれるアネモネは色鮮やかで大好きな花の一つ。茎の曲がりも面白く、咲いたときのことを考えながら長短をつけていける。赤い敷物に飾るとアネモネの赤色がより強さを増してくれる。雪柳とアネモネ数色。私の好きなとり合わせだ。

花材 雪柳(薔薇科)

アネモネ(金鳳花科)

花器 青色ガラス花器

「仙齋彩歳」をつくって 手前味噌で恐縮だが、父の文章といけばな写真をもとめた「仙齋彩歳」をお届けした皆さんから多くのお礼のお言葉をいただいた。「読み直したい」と思っていたので、大変嬉しい。「家宝にさせてもらいます」などと感激の言葉を頂戴するたびに、「お父さん、聞いてるか」と父に呼びかけている。

短時間でつくったことにも驚かれるが、まずパソコンに保存している文字データを元にレイアウトをやり直し、それを妹(はな)が過去の「テキスト」と全て照らし合わせてくれたのが第一段階(最終校正で文章が入れ替わっていることがあるため)。その後櫻子と選択作業をしつつ数人のスタッフに校正を依頼。途中、健ちゃんにレイアウトの駄目だしをもらったお陰で文章の少ないページに父の思い出の写真を加えることを思いつく。印刷の西湖堂さんも分分钟みで対応してくれた。正月明けの余裕のある時期に集中して作業できたことも幸いだった。

かくして「仙齋彩歳」は一冊の本にまとまった。今は父の文章を見返す度に涙があふれてしまう。流内の皆さんもおそらく同じだろう。泣いたり笑ったりしながら何度も読んでほしい。父は皆さんが望む時、いつもそばにいてくれる。「よっ!元氣でやってくるか!」にっこり微笑んで。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
4月号
No. 598

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





カエルの目線

△表紙の花▽ 桜子

背の低い花のとり合わせの時には、自分の目線を地面すれにしたところを想像しながらいけてみると面白い。私達は普段、そんな目線で物を見ることは無い。だからこそ新たな発見があったりすると思うのだ。上から見ていても見えないところが見えてくる。こんなところにこんな花が咲いている！。そんなわくわくするような気持ちで小さな花をいけてみよう。

春の温もりに誘われて伸びてきた**薔薇**。この薔薇を主役にして**母**の株を足もとに加えると、小さな母の花も色つき始めた赤い実も、薔薇のクルクルもじっくり間近で楽しめる。カエルの目線でいけたいけはな。

花材 薔薇 (薔薇科)

母 (薔薇科)

花器 三角柱花瓶

鉢植を生かす

△2頁の花▽ 桜子

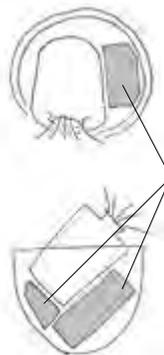
可愛い鉢植えを見つけたので買ってしまっただ。この小さな白い花の名前は西洋雲間草。雪の下科の常緑多年草で北ヨーロッパの原産。花色は白のほかに赤とピンクもある。日本には雲間草が自生していて、北アルプスなどの高山で雲がたちこめるような中に咲くところから名づけられた。

西洋雲間草は切って小さくいけること



もできないが、鉢植のような華やかさはなくなる。鉢ごと黒いビニール袋で包み、底の深い花器にそのままいけてみる。左図のように吸水性スポンジを切って枕にすると安定した。とり合わせた椿と黒百合は鉢と花器の隙間に吸水性スポンジをはめこんで、そこに挿していけている。

吸水性スポンジ



焦茶色の花器の上で、白い小花が自然の表情を見せてくれた。

花材 西洋雲間草（雪の下科）

黒百合（百合科）

椿（椿科）

オーストラリアの豆豆

△3頁の花▽ 櫻子

アカシア（俗称ミモザ）のフワフワした黄色い花に橙色の小花が連なったコリゼマを合わせてみた。コリゼマはオーストラリアのユーカリの森に生える豆科の常緑低木で、作例では鉢植から切っけていける。ミモザもオーストラリア産で豆科の常緑高木。同郷の豆科とうしのとり合わせ。

花材 銀葉アカシア（豆科）

コリゼマ（豆科）

アンズリウム（里芋科）

花器 細口陶角敏

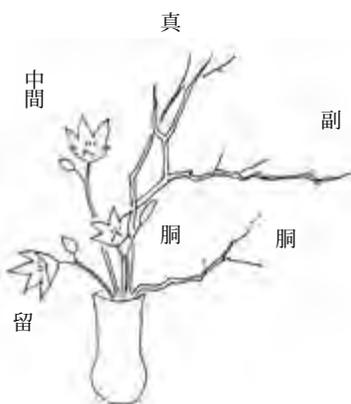


上り広がる枝・添って出る花

主材 土佐水木（満作科）
副材 透かし百合（百合科）

稽古を積んでいけばなはの技術が身についてきたら、枝の姿に合わせて自然体でいけてみるといい。枝が前へ出れば花はうしろへ。枝が横へ広がれば花は中央に、というように、花型を自在に工夫することで、さらに一歩前へ進むことが出来る。

投入斜体副主型（逆勝手・控省略）



右横から見たところ





③ 透かし百合は前から順にいけてゆく。まずは右前の胴の位置に。



① 土佐水木の花が自然にぶらさがって見えるように枝を花器に入れて手を離してみる。分かれ枝が逆勝手の真と副の位置におさまった。



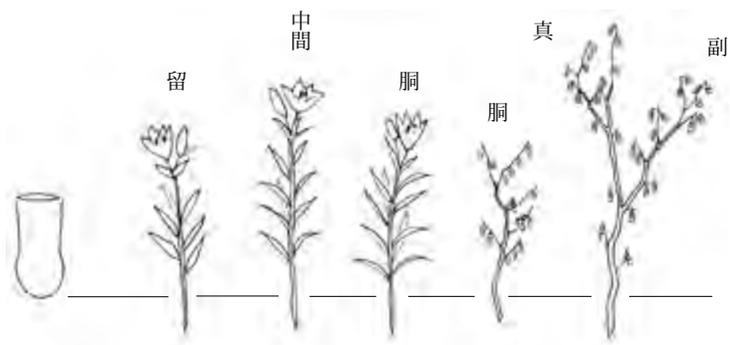
④ 土佐水木の枝に添わせるように透かし百合をさしたところ (中間の位置)。全体のバランスを見て3本目の透かし百合を加え、敷物に飾る。(4頁の花)



② あとで百合を3本入れるので、中央を大きく空けておき、別の枝を低く右へ出した。(胴の位置)

今回の投入では真の枝のおさまりが比較的うしろよりであったので、百合は3本とも前方へ出している。控を省略しているが、真の水際から出た小枝が奥行きを補ってくれている。

花型にしばられるよりも、土佐水木の花を愛でる気持ちを大切にしている。



各役枝の長さ

花器の水際

NHK「趣味D.O.楽」
〜ハンサムウーマン〜

桑原 櫻子

3月12日放送の「趣味D.O.楽」

に櫻子副家元が出演。花と料理によつて、自然を見つめ季節を感じながら豊かな心を育む様子が紹介されました。



JR京の冬の旅
センス・ザ・ミヤビ

キャンペーンポスターに櫻子副家元が協力。約3ヶ月間、全国のJR駅及び車内に掲示された。



「日本人の忘れもの
京都、こころここに」

京都新聞社 編

大震災後の二〇一一年七月から一年間、京都新聞に連載された一〇二人のエッセー集。

櫻子副家元もリレーエッセーと記念フォーラムで参加しています。

これからの日本をどうしてゆかということを考える上で、経済成長の代償として日本人が忘れてしまったものは何だったのかを考える作業は、その手がかりになる。定価本体一八〇〇円。



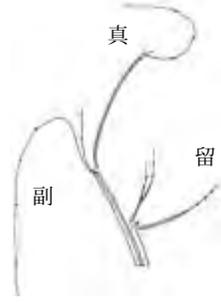
連翹 ^ 8頁の花 ^ 仙溪

花型 草型 副流し
花器 陶鉢

この連翹の生花は剣山を使って
いる。いけたあと、剣山がかくれるま
で砂利を入れておくと水際も見せ場
になる。

長く伸びた細枝があったので、そ
れを生かす工夫をして連翹らしさを
出してみた。真の枝先のカーブも撓
めてつくっている。

連翹は木犀科の落葉低木。中国、
朝鮮半島の原産。



洋花と青麦 ^ 9頁上の花 ^ 仙溪

大麦の若い花穂はいかにも春の
どかな感じがする。青麦の名前で早
春からよくいけるが、いけたあとだ
んだんと花穂が上にのびてゆく。と
り合わせには明るい色彩の洋花がよ
く似合う。無季節な感じの花も、青
麦と一緒にいけると、春の表情にな
るのが面白い。

花材 青麦 (稲科)
エビデンドラム (蘭科)
花器 橙色釉陶花器



△ 9 頁 下 の 花 ▽

解 説 は 10 頁



君子蘭

△9頁下の花▽ 仙溪

君子蘭は南アフリカ原産の彼岸花科クリビア属の多年草。明治時代に日本にやってきた。肉厚の長い葉が左右に広がり、中央に平たい花茎を伸ばして複数の花が咲く。王様のような威厳を感じての命名なのだろう。とり合わせにも気を遣う。君子蘭の個性を潰さないようなお相手を考える。作例では縞斑の入った玉羊歯と都忘れを選び、君子蘭が目立つように低く広げた。

花材 君子蘭（彼岸花科）
斑入り玉羊歯（玉羊歯科）
都忘れ（菊科）

外国の香り

△10頁の花▽ 仙溪

この白い小さな花は白花金雀児で、近づくとき強い香りがある。どんな香りかを表現したいのだが思い当たらない。自分の中では外国の香水の香りというところ。この金雀児をいけたあとで蜜柑を食べて「この蜜柑は新品種？」と勘違いするくらい手に香りが残っていた。剣山に立てると枝がふわりと広がってくれる。五色の大輪のガーベラを低く並べて白い小花を目立たせている。

実はこの金雀児、ほんのり緑色がかっている。花屋によると色を吸わせて緑色にしているらしい。しかも



イタリアからの輸入だそうだ。オシヤレにこだわるイタリア人ならわざわざ緑色を吸わせるのも理由があるのかもしれないが、白い花は白のままでもいいじゃないかと思ったりもする。でもそんな批判をしたところで、「楽しければいいじゃないか」と返されそうだ。

花材 白花金雀児（豆科）

ガーベラ（菊科）

ミリオクラダス（百合科）

花器 空色釉花器

波紋の器

△11頁の花▽

桜子

この青白磁は宮永東山氏がつくられた器で、どっしりとした六角柱をしていて大きな丸い口があいている。器の表面には波線が斜めに重なる。あたかも水面に風が吹く波の模様のような。椿をいけると、深山の水辺にいるような澄んだ空気を感ずる。

器の装飾にもいろいろあるが、宮永氏がつくる器のように、自然との接点を感じられる器には花がしっくりと合うように思う。きっと自然を敬う心がいけばなど共通しているのだろう。大好きな器。

花材 喇叭水仙（彼岸花科）

椿（椿科）

花器 六角柱青白磁（宮永東山作）



スカビオーサとアカシア

櫻子

花屋で見つけたら必ず買いたい花がある。スカビオーサもそのひとつ。複雑な花びらのかたち、薄紫から暗紫色、赤紫やピンクまでの色の変化も綺麗で、頼りなげに咲く姿も良い。しかし日持ちもする。松虫草の仲間なので、優しい趣を残している。日本では松虫が鳴く頃に咲くので松虫草と呼ばれているが、スカビオーサは疥癬せびんという意味で皮膚病に効く薬草として使われていた。ヨーロッパ西部に自生する花である。

最近では春先にも出回るようになった。本来は初夏から秋に咲く花なのに。その上黄葉のアカシア!。初秋に飾れば、素敵な取り合わせなのに。花の魅力に負けて買ってしまった事をお許しください。

花材 アカシアの黄葉(豆科)

スカビオーサ(松虫草科)

花器 ブルーガラス深鉢

「仙齋彩歳」

父がテキストに連載していただきました随筆「仙齋彩歳」と父のいけばなを一冊の本にまとめました。ご希望の方はお早めに家元事務局へお尋ね下さい。

定価 五千元



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
5月号
No. 599

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





オクローウカ 百合

△表紙の花▽ 仙溪

花型 生花 株分け

花材 主株 オクローウカ (薑蒲科) あやめ
 子株 小型の百合 (百合科)

オクローウカとピンクの百合で株分け生花をいけてみた。小型の百合にはスカシユリとヒメユリをかけあわせてつくられた「プチソレイユ」というのがあるが、プチソレイユはオレンジ色で、おそらくその系統の薄紅色の品種だろう。オクローウカの青紫色との色映りがいい。

オクローウカの原産地はトルコ周辺だそうで、丈夫で美しい葉のほうが早くに花材となっていたが、近年花も時季には出まわっている。写真では惜しくも花が開いてないが、花菖蒲の花をシャープにしたような姿で花弁はあまり垂れない。



花蘇芳 はなすお

△2頁の花▽ 櫻子

花蘇芳の樹皮は昔から染料として使われていたが、物を染めると美しい紫紅色となる蘇芳染めに似るところからこの名前になったらしい。



春の花木だが、枝の姿は単調だ。葉に先立ち小さな蝶形の花が沢山かたまつて咲く。ピンク色が多くて白は珍しいと思う。庭木として見ることが多いが、野生は高木になるという。大きめにいけた方が密集して咲く花の様子が良くわかる。今年の春は桜が散つてからも寒い日が続いたので、花蘇芳も花が長く咲いていた。

鉄線も芍薬（ポーラフエイ）も毎年出荷の時期が少しずつ早くなっている様な気がする。偶然の出会いの取り合わせ。

花材 花蘇芳（豆科）

芍薬（牡丹科）

鉄線（金鳳花科）

花器 透かし陶鉢

菖蒲と鵝芍薬

△3頁の花▽ 櫻子

菖蒲に芍薬はとてもよく映る。作例のように二種で盛花にしてもいいし、株分け生花にするのも調和が美しい。

作例の芍薬はトキシヤクヤクと呼ばれている。まだあまり多く出まわっていないようだが、咲くと白に淡いピンク色がさして、鵝が羽を広げた時のような色合いなのでこの名前がつけられたのだろう。葉も小さくて上品である。今後増えてほしいなと思う。

花材 菖蒲（菖蒲科）

オクロレウカの葉（菖蒲科）

鵝芍薬（牡丹科）

花器 交趾焼鉢



ミニガーデン

主材 ツルバキア（楓科）

副材 ツルバキア（百日合科）

ペラルゴニウム（風露草科）

手鞠草（撫子科）

作例の白いニラの花のようなのがツルバキア（淡い萼色が一般的）。ピンクの花がペラルゴニウムでセラニウムの仲間だ。この小さな二種類の花はいずれも南アフリカ原産。どちらもはじめてつけたがなんとも可愛い花である。

この小さな花たちを主役にする工夫として手鞠草を苔のように集めてその間から出してみた。金属パイプの口には銅のおとしがはめてあり、中に吸水性スポンジを入れて花止めしている。

手鞠草は髭撫子の園芸品種で、髭撫子の玉状に咲く性質を残しながら花弁のない萼だけが鞠状に集まった姿をしている。この手鞠草を同じ高さの数本寄せると苔がのっているように見えて面白い。この手法で湯飲みに付けて食卓に飾ってもよさそう。作例では器の強さにあわせて楓の小枝を横へ出している。細幅の民芸敷物に飾れば部屋の中にミニガーデンのできあがり。



③ 楓の小枝を枝振りにあわせて横へ出す。楓の足元は水揚げのために皮を削っておく。



① 銅のおとしのついたステンレスの筒に吸水性スポンジを入れて手鞠草を短くさす。吸水性スポンジはナイフで切って事前に水を吸わせておく。



④ パールゴニウムは鉢から小枝を切って使っている。二本前へ挿したところ。バランスを考えながらツルバキアを挿してゆく。(4頁の花)



② 合計五本の手鞠草で苔の山のようなふくらみをつくる。





金雀児 えにしだ へ8頁の花▽ 仙溪

花型 草型 留流し

花器 天女模様青銅花器

白花の金雀児を十五本使っているが、水際を細く寄せるために脇枝を掃除するのに手間がかかるのと、分かれ枝を櫛で解いたようにさばくのには根気が必要となる。

金雀児は生花以外ではあまりいけませんが日本の植物ではなく地中海沿岸原産。豆科の常緑低木で、明治期に導入され庭木や公園に植えられた。開花期は春。花色は黄色が主である。

この原稿を書いている今は「テキスト」撮影から二週間経つが、白い花がちらほらと咲きだした。水を替えているのでまだまだ綺麗に飾っておけそうだ。いける手間はかかるけれど、その分長く楽しめる。



京展出品作

木瓜 へ9頁の花▽ 仙溪

花型 草型



花器 緑釉耳付陶コンポート

今年の華道京展には木瓜の生花を出品した。太い枝にびっしりと花が咲いて、前期と後期の六日間、目を楽しませてくれた。花展のあと大切に持ち帰って撮影したが、運ぶ間にも花が散ってしまっただけで、まだまだしっかり花が残っている。会期中は花で枝が見えないくらいだった。この木瓜はおそらく私よりも先輩だろう。せめてちゃんと写真に撮らないと罰が当たる。感謝をこめて写真に撮った。



若葉色

仙溪

徳島生花研究会の折に武田慶園先生から柗木の若枝をいただいたのでいけてみた。まだ少し柔らかい葉は明るい黄緑色で、陽にあたると黄色くなるようだ。若枝の下には元からの葉がついていたが、若葉色を目立たせるため取り去っている。

柗木は日本から中国に分布する錦木科の常緑低木で、よく垣根として植えられている。いけばなでは古典花の生花の花材として使われる以外には使うことがあまりないが、若葉なら洋花と合わせても綺麗なのではないかと思う。

武田先生はこの柗木の若葉にグロリオサをとり合わせたことがあるそうだが、きつといい感じになると思う。

作例にはカーネーション二色（ピンクの濃淡）と紫色のリューココリネをとり合わせた。やや甘い感じになったが、初夏の爽やかさが感じられる。意外と相手を選ぶ若葉色だが水揚げもいいのでこれからもまたいけてみたい。

花材

カーネーション（撫子科）

リューココリネ（百合科）

柗木の若葉（錦木科）

花器

空色釉陶水差し



ポーンチャイナ 桜子

写真の器はイギリスのコープランド社製と聞いている。白地に金とトルコブルーで装飾されて、台座の三方には田園風景が細かく描かれている。ポーンチャイナのコンボートである。

ヨーロッパに中国の陶磁器が伝わったのは十三世紀頃。それ以降、東洋の陶磁器は盛んに研究されて、ヨーロッパで最初に磁器の製造に成功したのは十八世紀ドイツのマイゼン地方だった（一七〇九年）。日本の有田焼（柿右衛門様式）も大きな影響を与えている。

ところが当時イギリスでは白磁器の主成分であるカオリンが手に入らず独自の製法を工夫し、一七四八年、ボウ窯のトーマス・フライがイギリスで採れる原料の中に牛の骨灰「ポーンアッシュ」を加えることにより、よって良質の磁器を作ることになった。これが白磁器とは違う温かみのあるポーンチャイナの誕生だ。

ヨーロッパの人と話す時にはこの違いを知っておいたほうがいいだろう。白い洋食器はみんなポーンチャイナだと思っただけは馬鹿にされてしまう。骨灰を用いてつくられた磁器をポーンチャイナと呼ぶと覚えておこう。

花材 ベラドンナ二種（金鳳花科）

スプレー薔薇（薔薇科）

「フェアビアンカ」

花器 ポーンチャイナ・コンボート



パンダナス

仙溪

昨年四月の日本いけばな芸術展への出品が父の最後のいけばな展出品となったが(写真左)、花材はラタニアという椰子の実と深紅のアマリリス、そしてこのパンダナスであった。上の写真は花展後の師範認証式のためにいけ直したもので、ラタニアの代わりに白のアマリリスをいけている。

パンダナスの葉先は鋭く尖っているので触るととても痛い。花展ではこのやつかいなパンダナスに加えて、特大の別のパンダナスも父は入れている。痛がるうが自分の思いを伝えるためならことん手間をかけるのが父のいけばなであった。

花材 パンダナス(蝸の木科)

アマリリス二色(彼岸花科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 カットガラス・コンポート



二〇一二年四月

日本いけばな芸術展(大阪)

桑原仙齋 出品作

ラタニア パンダナス二種

アマリリス ミリオクラダス

鴝色

仙溪

日本で野生の鴝が姿を消してから十年が経つ。以前は日本各地に飛来していたので、「鴝色」という色名が鴝が羽を広げたときに見える風切羽の薄紅色からきているのを知る人も多かっただろうが、恥ずかしながら私は鴝色がいったいどんな色かも知らなかった。

先日の名古屋での稽古の時にSさんが庭に咲いた牡丹の色が鴝色なのだと教えてくださり、別の人は若い女性の小袖に鴝色が多いという話をされていて、なんとなく可愛い明るいピンク色を想像することができた。

調べてみると江戸時代の染色指南書「手鑑模倣節用」に「とき羽色一名志のめいる」とあって、しのめ東雲色と同色であるときれている。また二葉亭四迷の「浮雲」には、十八才のお勢が黄八丈の小袖に藍鼠あおねずの帯、帯上に時色縮緬という姿で菊見に出かける様子が書かれている。「時色(鴝色)」や「藍鼠」という色がどんな色なのか、「黄八丈」がどんな織物なのか知っている人はどれくらいいるのだろう。日本の伝統文化から色名が消えてしまっただけは楽しみが半減してしまう。色名の原点は染色にあり、着物文化で次の世代に引き継いでいかねば消えてしまう。
日本から野生の鴝は消えてしまっただけれど、色名としては残ってほしい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
6月号
No.600

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





路地 へ表紙の花▽ 櫻子

「路地を通ってくる間に気持ち切り替わります」とお弟子さんによく云われる。三十坪の石畳に水を打ってお迎えをするのだが、そのご褒美に爽やかな風が吹き抜けて行く。水まきは迎える側も心地よい。

花材 七龍(薔薇科)

芍薬(牡丹科)

花器 陶花器(清水美菜子作)

掛け花 へ2頁の花▽ 仙溪

アスチルベの和名は升麻、泡盛草。この仲間は東アジアと北アメリカに分布し、日本にも泡盛升麻が自生する。泡のような可愛らしい花である。

玄関の掛け花は季節の花を小さくいけている。前へ低く出すのがポイント。写真はあえて横から写した。

花材 ベル鉄線(金鳳花科)

アスチルベ(雪の下科)

花器 陶花器(清水美菜子作)

玄関花 へ3頁の花▽ 櫻子

ビバーナム・スノーボールは和名を西洋手鞠肝木という。ビバーナムは忍冬科・菘菜属の総称である。

玄関の間には少し大きめの花をいけている。この朱塗りの円卓は、季節を感じつつ華やいだ雰囲気の花が似合う。

花材 カラー四種(里芋科)

スノーボール(忍冬科)

花器 カットガラス花器



テキスト六〇〇号

「桑原専慶流いけばなテキスト」第一号は一九六二年十月に発行され、今回で六〇〇号になる。十二ヶ月で割ると五〇年だが、都合により発行できなかった月があるので五十二年目。表紙の「テキスト」の題字は日本画家の由里本出氏ゆりもとでしの字である。祖父から父と母へ、父と母から私と櫻子へ引き継いできた。

祖父の「テキスト」はその内容も変幻自在で、花道の心得を丁寧な解説し、いけばなにまつわるあらゆることをなにか伝えるための様々な工夫がなされている。丁度「いけばなの四季」という花道入門書の出版と同時に進行で内容の充実に腐心されていたのだと思う。ときにはまだ小さかった櫻子の墨絵もカット画に使ってあつて楽しい。

父と母の「テキスト」は二人がそれぞれに花をいけ、文章はすべて父が書いていた。母はいつも次のテキストでいける花を考えていたし、父の文章には父の哲学が込められている。それらの一部は「ホッホチャンとケンチャン」「富春軒三代」そして「仙齋彩蔵」という本になった。

今は私たちの番である。写真では伝わらない立体感をどのように伝えるか。いけばなのいけ方だけでなく、その周辺の知っておくべきことも加えて、いけばなの普及を見据えた内容を。など、やりたいことは多い。今後共応援をお願いします。



花菖蒲

花型 行型 五花九葉

花器 陶水盤(竹内眞三郎作)

花菖蒲の見頃は六月前半から中旬
 だろう。端午の節句の頃はまた本
 来の時季ではないので、早咲き品種
 のみが出まわるが、花菖蒲の品種は
 現存するもので二千種といわれてい
 る。とてつもなく多くの品種がつく
 られてきたわけだ。日本全国に約
 二百の花菖蒲園があるそうなので、
 季節には花見にでかけた。

東京の明治神宮(百五十種)、大
 阪の城北公園(二百五十種)には行っ
 たことがあるが、それぞれに心に残
 るものがあった。

さて、古典いけばなでは葉組とい
 うものがあり、花菖蒲は葉株をいつ
 たんはずしてから重ね合わせて美し
 い姿に形作る。最初はなかなか葉が
 くっつかないが、稽古を重ねるとこ
 っがかめるようになる。

うまく葉組ができるようになってくると、葉がのびてゆく過程に思い
 を馳せる余裕もできる。外側の短い
 葉を親葉と呼ぶが、この短い葉が最
 初に生まれてその中から次の葉が伸
 び、順々に中から生まれた葉が前の
 葉を追い抜いて高く伸びていく。つ
 まり順に支えあいながらどんどん背
 をのぼすのだ。そして葉先は互いに
 向き合っている。なんだかとても素
 敵な関係だと思いませんか。植物の
 「出生」には植物の生き様が見える。

ビッグイシュー日本版
「生き残りのしくみ」
春、植物の生き方に学ぶ

月に二回、京都の三条大橋東詰で「ビッグイシュー日本版」を買ったのを楽しみにしている。「ビッグイシュー」は書店ではなく路上の販売員さんから買う。ホームレスの自立支援のために一九九一年にイギリスで発行が始まったもので、代金の半額強が販売員の収入になる。日本でも二〇〇三年から発行されている。

もちろん支援の気持ちもあるが、自身がいいのも購入理由の一つだ。経済学者の浜矩子氏と作家の雨宮処凛氏のコラムが好きだ。映画俳優のインタビュもかなり踏み込んだ内容。そして特集記事の中には今の時代と向き合う内容のものが多く。

四月一日号の特集は表題のような植物にまつわるあれこれ、大変興味深かったので一部をここで紹介しておきたい。

まずはじめに生物学者の田中修氏（甲南大学理工学部教授）からのメッセージを。

「植物たちは、いつでも、どこにでもあります。でも、見飽きるということはありません。何も悪いことはないし、嫌なことも言いません。その上、ときどきして、喜びや感動を与えてくれます。」

「そんな植物たちは、私たちと同じ

生き物であり、同じしくみで生き、同じ悩みをもち、その悩みを解くために毎日がんばって努力しているのです。」

「植物たちは、その祖先が海から上陸して以来、約四億年間を生き抜いてきています。生きるために巧みなしくみを工夫し、不都合な環境に耐え、逆境をはね返してきました。」

「ですから、その生き方には、私たちが励まし勇気づけられることや、慰め癒されることや、新しい意欲を掻き立てられることなどが多くあるはずです。」

ワクワクするメッセージではないか。内容は次の六つの章に分かれている。

一章 「自力で生きられる植物。そしてすべての動物を養う」

二章 「病気への生き残り戦略。多様な子孫を残すこと。」

三章 「毒による護身術」 体内に独自の毒をもつ植物たち

四章 「太陽の光とたたかう」アントシアニンとカロテンで装

五章 「逆境を生きのびる術」変幻自在、たくましい植物の生き方

六章 「命を次代につなぐ多様な工夫」 タネ、自家受精、ハカラム、地下茎

では一章から順に内容の一部を紹介したい。

自力で生きられる植物。そしてすべての動物を養う

四十億年前、地球上の最初の生命は、海の中に何億年もかかって貯められていったスープのような栄養物を食べて生きていた、つまり動物的な生き方をしていた。

ところがやがて栄養物は食べつくされて生命が絶滅の危機に瀕した時に、それを救ったのが植物の祖先だった。食糧がないのなら自分でつくろう、という植物的な生き方が出てきたのだ。

その後、海の中の一番上層にいた緑藻類が波で打ち上げられて、陸上で生活をはじめたのが約四億年前で、動物もそれを追って約三億年前に陸にあがってきた。

植物たちは根から吸った水と空気中の二酸化炭素を材料に、太陽の光を使って自分の葉っぱでブドウ糖やデンプンをつくる。そして窒素という養分を地中から取り込んでアミノ酸をつくり、それを組み合わせて自分に必要なタンパク質、脂肪、ビタミンなどもつくることができる。一歩も動かずして、自分自身で必要な栄養をすべてつくり出す能力を備えているのだ。

このようなことは私たち動物から見れば魔法のようなことである。

(次号でも続けて紹介します)

花菖蒲 五花九葉



花の位置や葉組の形は一例であり、必ずこのようにするというものではない。作例では花を高いところだけに使い印象的な花型にした。

真

内副

真副

副

胴

副の沈み

留

留の沈み

控



NIHONJIN NO WASUREMONO

日本人の



れもの

44

第2部 忘 || 華森清範 清水寺貫主

いけばなの心

結婚を決めた相手は、江戸時代から続く花道家元の娘であった。それが私がいけばなを習うきっかけとなり、心の中の美を形にする父と、おおらかに花と向き合う母と、もてなしの気持ちを伝える妻とともに、花の道を歩んできた。

いけばなとは。シンブルに言えば、地に根を張って立つ木や草花から一部を切り取って水を入れた器にいけることなのだ、それらが「いい表情を見せてくれる」には、それなりの経験の



桑原仙溪

桑原専慶流家元

成すべきことを

真剣に考え、

変えるべきことは

しかし、その半

面もつと気楽に、身近に花をいけてほしいとも強く願う。心のこもったいけばなは、人の心を和ませる。花がいてであると自分もまわりの人もほつとする。部屋の空気ががらりと変わる。そんないけばなの力を知ってほしいし、もっと暮らしに活用してほしい。

私が花をいけるとき「自然の息吹を敬う」気持ちを大事にしている。



花に新たな命を吹き込み「生かす」ことを考え、構想する家元。 (2011年11月/流展)

ドイツ・テテロー市775年記念祭典にて花をいける家元と桑原櫻子副家元。(2010年5月/聖ペテロ・パウロ教会)

いけばなである。

花の茎を水の中で切ると、ぐぐつと水を吸い上げる。葉に霧を吹いて手で広げるとしゃんとする。束をほどいて枝を本来の姿にもどすと気持ちがいい。若松の幹を手で磨き古い葉を取り去ると輝いてくる。「生かす」ために花や木に触れるうちに自然と心を通わせているのに気付く。いけばなを習って良かったと思う瞬間である。花を習っていないかったら、松の枯葉を掃除したあとの清々しさを味わうこともなかっただろう。

私たちは自然に生かされ、豊かな心を養ってきた

いけばなに限らず、多くの芸術・文化は自然との関わりの中で生まれ育ま

変える時がきている。

積み重ねが必要となる。ところが一年に一度しかいけられないような花材もあるうえに、何十何百という種類の植物を相手にするので生涯修業は続く。また花材のとり合わせ、花器の選択によって良くも悪くもなるので、自分自身の美の感覚を磨くことも大切。

古典様式の「立花」には九つの役枝がある。松一色立花／桑原仙溪



古典様式の「立花」には九つの役枝がある。松一色立花／桑原仙溪 写真＝宇佐美宏

あつて立てるのに一日かかったりする。花道は奥が深い。

もつと気楽に身近に花をいけてほしい

→

生き生きとした花や味わい深い枝は、大地・風雨・太陽が育み、そこに人の手加わって私たちの手元に届く。虫や鳥も関わっている。そんな花に、新たな命を吹き込んで「生かす」のがい

→

れてきた。私たちは自然に生かされ、豊かな心を養ってきたのだ。自然の恵みを受けて生かされていることに感謝し、先人が培ってきた自然との関わり方を「学び磨いて生かし伝える」ことが大事だと思う。

2年前の大震災で、自分の成すべきことを、あらためて考えた人は多かった。福島原発事故によって原子力の恐ろしさに気付いた人も多かったはずである。安易に電氣を得る代償に美しい豊かな自然との関わりが断ち切られてしまったのだ。放射能による内部被曝はこれからどんな影響を及ぼすか知れない。放射性廃棄物の処理もままならない。このことに私たちはもつと絶望すべきだ。そして、成すべきことを真剣に考え、変えるべきことは変える時がきている。子どもたちの未来のために。人も含めた美しい自然を損なわないために。

●くわはらせんけい
1961年、大阪市生まれ。80年、桑原専慶流に入門。84年、同志社大工学部卒業。同年、同流14世家元長女櫻子と結婚、家元を補佐しながら教授活動を開始。2004年、15世家元襲名。日本いけばな芸術協会理事、京都いけばな協会副会長。

京都新聞 4月28日(日)に掲載された『日本人の忘れもの』第2部44の紙面より転載。(カラー一面)



富士山 〆9頁の花〆 仙溪

この花器の銘は「タワー」で、私が勝手に富士山の花器と呼んでいる。この花をいけた数日後、富士山が世界文化遺産に登録されると、ニュースが流れたのは偶然である。冠雪も溶けゆく六月の小品。

花材 猿捕茨(さいせいのいばら) (百合科)

鉄線二種(てつせん) (金鳳花科)

花器 陶細口花器(たわこまぐち) (竹内眞三郎作)



白の上

△10頁の花▽ 仙溪

4頁と9頁は二階の稽古場の板床と縁側である。普段は稽古の見本を飾ったりしているが、神聖な稽古場なので少し緊張して見て頂いていることと思う。稽古場は花道の道場だ。稽古を終えて一階へ下りると少しほっとされるだろう。そんな時は家の花をゆっくり見て帰ってほしい。10頁のように玄関の白の上にも時々花をいけている。いつもは写真の左側が正面になるようにいけているが、ここにいける花は後ろ側にも気を遣う。まわりの空間に呼応するようにながけていける。

花材 黄素馨 (木犀科)

百合「スイートメモリー」

(百合科)

撫子 (撫子科)

花器 青白磁花器 (宮永東山作)

庭のテーブル

△11頁の花▽ 櫻子

父と母は玄関前のこの空間で時々朝ご飯を食べていた。たっぷりの紅茶とイギリスパン。表通りから深く入っているので閑かなのだ。庭の花の蜜や虫を食べべに鳥たちもよくやっ



てくる。草むらの中はレモンちゃんの昼寝場所にもなっている。レモンちゃんは昨夏から居る猫である。前のゴンちゃんはシャイな猫だったが、レモンちゃんは人なつこい。たまに稽古場にやってくるのをどうしたものか思案中。

以前のテキストでも甥っ子たちの作った猫と一緒にこの場所で薔薇をいけたことがある。花は折々の記憶を色彩豊かにしてくれる。

花材 薔薇(薔薇科)

紫陽花(紫陽花科)

花器 ガラス花器(クリシー製)

水を感じる

△12頁の花▽ 櫻子

たとえ水が見えなくても、いけばなの水はとても大切である。花にしてみれば、いつもきれいな水を吸っていたいにきまっている。花の水をいつもきれいにしている人には、いい花がいけられる。それは花の気持ちになれるから。それはもてなしの気持ちを持っているから。

美しい水を感じる花がいけられるようになろう。

花材 バンダ二種(蘭科)

レースフラワー(芹科)

花器 彩泥玉型花器(宮下善爾作)



これからのいけばな

京都新聞「日本人の忘れもの」にも書いたことだが、自然の恵みを受けて生かされていることに感謝し、先人が培ってきた自然との関わり方を「学び磨いて生かし伝える」ことの大切さを痛感している。私達は自然に生かされて豊かな心を養ってきたのだ。

私が小さい頃のおじいちゃん、おばあちゃん、自然との関わり方を沢山知っていた。今でも友人の中には子供と一緒に山菜を摘んで食べる楽しみを知っていたり、草で笛を器用に作れたりするのがいるが、そういう経験こそ豊かなことだと思う。

ある小学校では校長先生自ら校庭にできた実をもらって食べ、子供達がこっそり真似をするようになっていく。随分植物への関心が高くなってきたそうだ。素敵な校長先生である。

植物の中には毒をもつものもあるので関わり方を間違えるとひどい目に遭うが、昔からの自然との関わり方には知恵がいっぱいつまっている。食べることを、遊ぶことを、薬にすること、ものをつくることを、芸術を生み出すこと、そしていけること。

いけばなは植物との関わりを深めるだけでなく、いける喜びやもてなす楽しみがある。いいいけばなは心地よい「和」を生んでくれる。人と人との心をつないでくれる。そういうこともいけばなの大切な役割だと思っ。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
7月号
No.601

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ヒマワリとズッキーニ

△表紙の花▽ 桜子

まん丸のズッキーニは賀茂茄子やトマトと同じように、しばらく食卓に飾って眺めている。

向日葵は日本では食用油くらいしか知られていないが、中国ではお茶を飲みながら向日葵の種を食べる。殻を割るのが面倒だし、中身も少ないので苦手だなど思っていたが、実はすごい健康食品なのだ。ビタミンE、鉄分、亜鉛他多くの栄養素が含まれる。コレステロールを下げ高血圧や貧血を防ぎ若返りの効果もある。

ズッキーニはペカボチャの仲間。こちらもビタミンBや食物繊維を多く含む。鑑賞してもお料理しても元氣一杯の夏の花と野菜。

花材 向日葵(菊科)

柏の斑入り葉(山毛櫨科)

ズッキーニ(瓜科)

粟(稲科)

花器 ガラス花器

下向きに咲く内気な花

△2頁の花▽ 桜子

以前はアリウムの仲間に分類されていたが、今は百合科で、ネクタロスコルドウム・シクラムという学名で呼ばれている。買った時から花が枝垂れていて、上を向いた!と思ったら、花が枯れていた。花が終わると上を向くのだ。不思議な花だった。夏はガラス器にいける事が多い。花茎が花器の下まで着かないように浅く挿



して、ガラス越しに茎を見えにくくしている。

夜に水温が上がって花が萎れてしまう事が多いので、夕飯の片づけをしながら水を替える事になっている。朝起きて花がきれいだと思いがいいから。

花材 ネクタロスコルドウム・シクラム(百合科)

トルコ桔梗二種(竜胆科)

ディフェンバキア(里芋科)

花器 紺色ガラス花瓶

エレガフミナ

△3頁の花▽ 櫻子

今年初めて出会ったアフロディーテ・エレガフミナ。クレマチスの仲間である。とても優しくしなやかで、ワインディキヤンタに飾った。暑い部屋でも時折通りぬける風に揺れながら、長持ちしてくれた。

北半球の温暖な地域には原種が約300種はあるクレマチス(金鳳花科クレマチス属)。その中で「鉄線(中国名・鉄線蓮)」と呼ばれるのは中国原産の一種だけなのに、つい何でもテッセンと呼んでしまう。改良種であっても野生のような雰囲気を持っているからだろうか。フランスの個人の庭で作例に似た小さな花のクレマチスが石壁に這わせて育てられているのが美しかった。

花材 クレマチス・アフロディーテ・

エレガフミナ(金鳳花科)

アガパンサス(百合科)

野葡萄(葡萄科)

花器 ワインディキヤンタ



苔木こけぼく 晒木しゃれぼく

仙溪

父がいけばな展に出品してきた立花や生花には、苔がびっしりとついた古木を好んで使っていた。冬の苔梅は特に好きだったようだ。苔むした枝自体、なかなか手に入らない花材であるが、深い味わいというものを感ずることができる。一本筋の通った凛とした風格のようなもの。父の求めていたものもそういうものだったと思う。

苔梅などをいけたあとは、花が終わっても捨てずに残している。盛花に覗かせたり、組み直して立花に使ったり、蔓ものをいけるときの土台として使える。

また晒木も残してある。主に立花に使うためだが、盛花や投入に加えると、重厚な雰囲気や自然の妙味を表現できるので、見つけたら大事に持っておかれるといい。

盛花や投入に晒木を混ぜる場合、重量のバランスに気をつけること。そのまま器にいけるのではなく、しっかりとした支柱をつけていける。晒木をうまく使いこなせるかどうかは、重さに見合った仕掛けができるかどうかにかかっている。作例では短い晒木を水際に見せて、上山苔をのせている。本来なら朽木を使いたいところだが、これでも深山の空気を感ずられる。苔には霧を吹いて飾る。

花材 夏蘆なつはぎ(躑躅科)

京鹿の子きんかくこ(薔薇科)

蜚袋ひふく(竜胆科)

晒木・山苔

花器 かいらぎ釉水盤かいらぎゆうすいばん(木村盛伸作)



③ 晒木の仕掛けが隠れるように、水際に夏櫛を加える。後方にも夏櫛を低く入れて奥行きをつくる。



① 晒木に棒（作例では割り箸を使用している）をつけて（作例では太針金で括り付けた）剣山にとめる。重さによってはねじ釘で固定したり、棒を2本つけたりすればいい。



④ 京鹿の子を左前と右後ろへ立てたところ。空いたところに蛭袋をのぞかせる。晒木はそのままでもいいが、作例では山苔をのせて霧を吹いた。（4頁の花）



② 夏櫛を低く前へ出す。



右横から見たところ



盛花斜体留主型（逆勝手）



【記録】

京都いけばなプレゼンテーション2013

今年から京都市と京都市芸術文化協会の主催による新しいいけばなイベントがはじまった。いけばな展と新たな情報発信をする。

一回目は「六月六日はいけばなの日」のピーアールを兼ねて、花菖蒲花会、お稽古はじめいけばな体験とシンポジウムという内容で開催され、花会には桑原専慶流から三名が立花、生花、現代花を出品した。

三十四流派それぞれの違った花の見せ方があり、特に古典花では流派による葉組の違いを観る事ができた。

シンポジウムには華道以外にも狂言の茂山千五郎氏、尺八の倉橋容堂氏、ピアノの高木千寿子氏が加わって「伝える」ことの伝統と工夫についてお話をいただいた。

また基調講演は国際日本文化研究センター名誉教授の村井康彦氏が中世の文化の活力についてお話くださり、「いけばなが文化醸成のための集いの場をつくる」という考え方を提案していただいた。

ビッグイシュー日本版

「生き残りのしくみ」②

植物が動物を養っている、といっても食べつくされては困るので、植物それぞれに独自の工夫をして自己防衛をしている。「渋み」「辛み」「苦み」「えぐみ」「酸み」などもその自己防衛の現れだ。

例えば柿の実の中のタネができるまで虫や鳥には食べられないように「渋み」をもっている。やがてタネができる「渋み」は無くなって甘くなる。

「タゲ食う虫も好き好き」というように、たとえ辛いタゲを好んで食べる虫がいるとしても、植物も動物も、それぞれに棲み分けをして好みを分散することで生きていけるのだ。

「競争したらどちらかが滅んでしまう。生物はちよつとだけでも嗜好が違つと、どこかで生きていけるんですよ。」(田中修先生)

病気への生き残り戦略 多様な子孫を残すこと

桜餅の甘い香りのもと、虫を撃退するためにサクラが用意したクマリンという物質である。サクラの葉にはクマリンになる前の物質と触媒になる物質が別々に存在していて、虫がかかることでこの二つの物質が出合い、反応が進んでやがて香りが

でてくる仕組みになっている。

他にもクスノキの葉を傷つけると芳香を放つことはよく知られている。(防虫剤に利用↓樟脳)

またマツやヒノキなどの針葉樹はカビや病原菌を遠ざけるために香りを放っている。私たちはそれを爽やかな香りとして感じて「森林浴」を楽しんでいる。このような植物が放つ香りは総称として「フィトンチッド」と呼ばれている。

「植物は突然変異を繰り返し、ここまで進化してきた。ある植物の原産地を調べると、その種が生き残るぎりぎりの環境であることが多い。ヒノキもあの香りを出したから原産地で生き残つてこられたんだと思う。その後人間があちこちに移植して増えたわけです。」(田中先生)

さらに植物は怪我をするとかさぶたをつくつて身を守る。バナナやリンゴを切ると表面が褐色に変わるのもその一つで、これはもともと紫外線の害を消すために植物の中にあるポリフェノールが酸素と反応して固まったもの。

タラヨウ(別名・ハガキノキ)の葉に釘などの尖つたもので文字を書く、しばらくしてからくつきりと黒く浮き上がってくるのも同じ原理だ。

植物にとつて多様な子孫を残すことが病気に対する最大の生き残り戦略であり、そのためにいろんな知恵をしぼってきた。(次号へつづく)



【記録】

日本いけばな芸術展(東京)

会期 5月24日(金)~25日(土)

会場 日本橋高島屋

出品 桑原仙溪

花型 除真立花

花材 真松

正真 紫蘭(桃色、黄色)

副 晒木

請 五葉松

見越 晒木

控枝 松

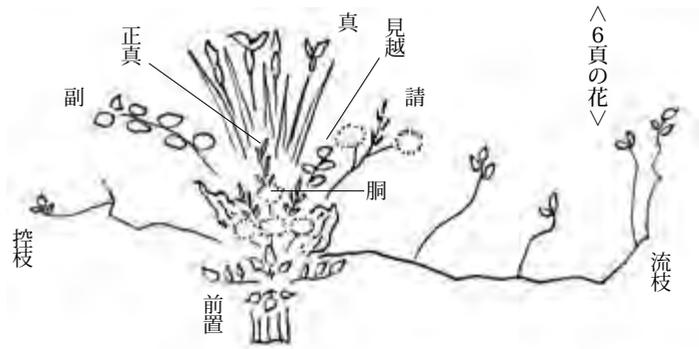
流枝 晒木

胴 燕尾仙翁 晒木

前置 松



△6頁の花▽



△8頁の花▽



平籠にいける

櫻子

穂咲七籠が出回ると祇園祭も近いなあと感じる。夏の草花をいける時に足元に使ったり、花型に広がりを感じさせるには必ず添えたいと思う。

まん丸の小さな蕾が、ぱつと咲いて綿帽子のような真っ白の塊になる。七籠に葉が似ているのでこの名前がついた。七籠とは同じバラ科であっても属は違う。木ではあっても涼しげで軽いので籠花にも良く似合

う。

白竹の平籠に矢筈薄、桔梗、撫子と取り合わせた。穂咲七籠を足元に添えようと、左右に長く横張りの花型にいける事が出来る。そうする事で他の草花も伸びやかで生き生きとした姿になり、それでいて軽やかである。夏は風通しの良い花をいけたいと思う。

花材 矢筈薄(稲科)

穂咲七籠(薔薇科)

撫子(撫子科)

桔梗(桔梗科)

花器 白竹平籠



黄菖蒲 きしやうぶ

〈10頁の花〉 仙溪

初めて海外でいけばなを披露した時にいけたのが黄菖蒲の生花だった。ドイツ・デュッセルドルフ郊外につくられた日本庭園の池で咲いていたのを切らせてもらったが、大きな長い葉でなんとか葉組もできて、ほっとしたのを覚えている。

西アジアからヨーロッパに分布する黄菖蒲が日本に来たのは明治頃だそうで、今では全国の水辺に野生している帰化植物である。

京都の深泥ヶ池でも見るようになったが、ここには貴重な在来植物が多いので駆逐されないか少し心配である。

ともあれ花菖蒲や村若には無かった黄色の花は人目を引く。珍しく花屋で売られていたので同じ水辺の植物である半夏生はんげしょうをとり合わせ、薊あざみで色を加えた。黄菖蒲の花には花菖蒲ほどの強さはないが、優しい印象をつける。

花材 黄菖蒲（菖蒲科）

半夏生（藪科）

薊（菊科）

花器 長方形陶水盤（伊藤典哲作）

ジューンベリー

〈11頁の花〉 仙溪

花型 二瓶飾り

主瓶 草型副流し

ジューンベリー（薔薇科）

副瓶 行型

ミニ薔薇（薔薇科）

花器 陶花瓶

ガラス小鉢



日本の中南部、四国、九州に分布するザイフリボク（采振り木）はシデザクラの別名があり、四〜五月に白くてやや細長い五弁花が咲いたあと実ができて熟すと食べられる。

ザイフリボクの仲間では北米原産のアメリカザイフリボクはジュンペリーと呼ばれ、近年果樹として栽培されてきているらしい。

花屋でジュンペリーの名前で赤い実のついた枝が売られていたので、生花に付けてみた。はじめていけたのだが、葉の水揚げもよく、これから花材として出まわるようになるだろう。一種では物足りないので、ミニ薔薇をとり合わせて二瓶飾りにした。

ギガンチウム

ホワイトスネーク

△12頁の花▽

仙溪

葱坊主を二種類使った。どちらも立派な球状に無数の花が伸び出てきている。

鮮やかな紫色はおなじみのアリウム・ギガンチウムで、茎の曲がった白っぽい方がアリウム・ホワイトスネークと呼ばれていた。

この二種の強さに負けない花に赤い大輪の百合を選んだ。品種名はビビアナで、二本でこれだけのボリュームがある。

この花器は口が広いので大きめの丸剣山を底に入れていけている。アリウムは剣山にさして、百合は投入式にかけた。

花材 アリウム・ギガンチウム（百合科）

アリウム・ホワイトスネーク（百合科）

百合（百合科）

花器 広口陶花瓶（前田保則作）



グランドマスター

「グランドマスター」という映画を観た。近代の中国武術継承者たちがどのような生きかたが描かれている。ぐつぐつと煮える蛇のスープを前にして、火に新たな薪を入れるかどうかを語りながら、武術界の舵取りを話し合うところが面白かった。火が強いと焦がしてしまうし、弱いと本来の味がでない。武術の神髄を伝承するために、新しい息吹を加えることが良い選択なのかどうか、武術界のトップは苦悩する。

中国武術の門派は四百以上あるそうだが、その中の一つ詠春拳の継承者の一人、葉問(イップマン)が映画では中心的存在になっている。詠春拳は中国南部に伝わる武術で、技の型は「小念頭」「尋橋」「標指」のわずかに三つ。この基本を修練することで自然に体が反応して相手の攻撃を防御する。

いけばなは武術のような戦いではないので比べるのはおかしいが、稽古を重ねて技と心を体得することや、その神髄を身につけて次へ伝えることに悩むのは同じだと感じた。

「いけばなにとって」「この三つのことを身につけよ」というようなものは何だろう。いろんなことが思い浮かぶが、つきつめていけば次の三つを探究することになると思う。

「心」と

「技」と

「美の感覚」。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
8月号
No.602

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





玉川杜鵑草

唐糸草

山荷葉

△表紙の花▽ 仙溪

夏向きのさらりとした盛花。それぞれに名前に特徴があつて面白い。上中下と三層に分けていけることで、真ん中の唐糸草の花穂を印象的に見せている。

唐糸草は薔薇科・吾亦紅属の多年草で、紅紫色の繊細な糸に見えるのは雄しべで、まさに絹糸（唐糸）の束のようだ。日本の山野に生える。

その足元を隠すようにいけているのは実のなつた山荷葉である。目木科・山荷葉属の多年草で日本の中部以北の林床や沢に生える。荷葉とは蓮の葉のことで葉の形を蓮に見立てた名前。山荷葉の実は青紫色に熟すと甘酸っぱくて食べられる。

さて、それらの後ろに立つのは玉川杜鵑草である。普通、杜鵑草は秋に咲くが、玉川杜鵑草は夏の花。花は黄色で北海道から九州の冷温帯域に分布する。

「玉川」とは京都府井出町の川の名前に由来する。玉川は奈良時代すでに山吹で有名で、玉川杜鵑草の花色が黄色であることから、山吹を連想させるので玉川の名前がつけられた。



「玉川」「山吹」で調べると、万葉集の撰者の一人、橘諸兄が玉川付近に別荘を建て、庭に山吹を植えたとある。花の名前には文化の香りが残されている。

花材 玉川杜鵑草（百合科）

唐糸草（薔薇科）

山荷葉（目木科）

花器 陶花器

烏葉八角蓮

△2頁の花▽ 仙溪

八角蓮は目木科・ミヤオソウ属の多年草。中国中部から南東部と台湾に自生する。全草にポドフィラムというアルカロイドを含む有毒植物。中国では解毒剤として利用される。属は違っても表紙に使った山荷葉とは同じ目木科で、なんとなく姿も似ているが八角蓮の花は葉の下に咲くところが異なっている。

烏葉八角蓮は鉢で買ってきて根洗いし、最初に器にとめてから他の花をいけている。珍しい形の葉が隠れないように気をつけた。茎の曲がった丘虎の尾を左後ろに伸ばして変化をつけている。

花材 烏葉八角蓮（目木科）

小鬼百合（百合科）

竜胆（竜胆科）

丘虎の尾（桜草科）

花器 青白磁水盤



段江浦草 睡蓮

△3頁の花△ 仙溪

花型 株分け

主株 段江浦草 (蚊帳吊草科)

子株 睡蓮 (睡蓮科)

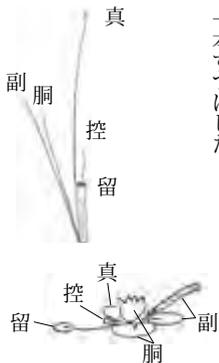
花器 陶水盤

水辺の株分け生花の作例。

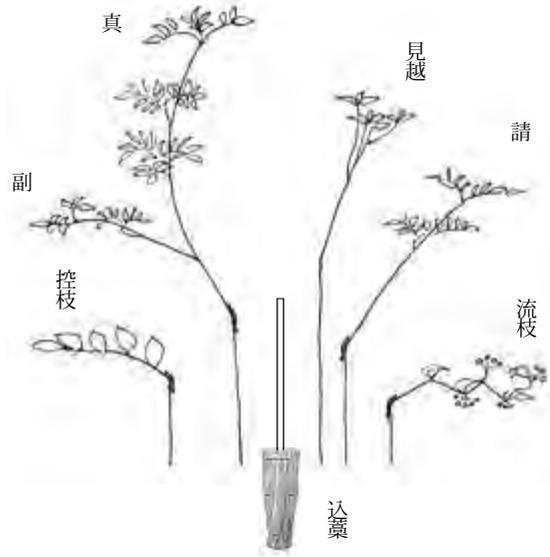
主株の太藪は縞太藪または段江浦草と呼ばれる斑入り品種で、太藪よりも丈は短いのが清涼感がある。太藪は湿地や浅い池、沼、湖畔などに生育する多年草。長く伸びた花茎の先端に花序がつく。万葉集には大藪草の名前で詠まれている。

太藪の群落が風や水の動きにあわせて揺らぐ様子は風情がある。たつぷりの水をはった器にいけない。作例では切り株を留めている。

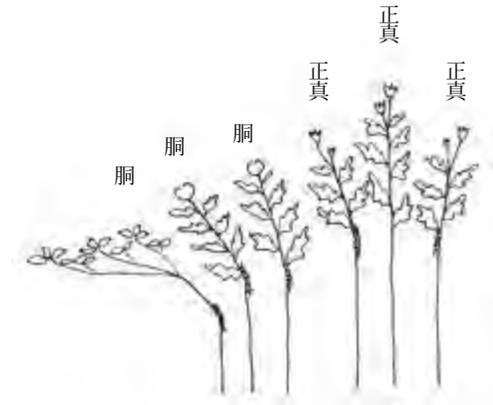
睡蓮は池や沼の水面に浮かぶように咲く多年草。若葉は巻葉の状態水面から顔を出し、やがて広葉となるにつれて傾き倒れ、浮葉として成長する。日本には白花で小型のヒツジグサが自生し、花屋には外国種のもの切り花で出回る。水面上で生花のバランスに葉、巻葉、花を配置する。水面が小さいので花と巻葉を一本ずつにした。



立花の役枝 正面から見たところ (前後に出ているので実際の長さは絵よりも長い)



横から見たところ



- 花材
- 七竈(薔薇科) ななかまど ばら
 - 満天星(躑躅科) どうたんつじ つつじ
 - 山崩来(百合科) さんきらい
 - 二輪菊(菊科)
 - 菊(菊科)
 - 鳴子百合(百合科)
 - 姫百合(百合科)
- 花器
- 羽島焼花瓶

七竈真の立花

△4頁の花▽ 仙溪

夏の立花。作例の七竈はここ数年、初夏から出回るようになったもので、よくしまった葉が半分紅葉している。自然に紅葉した七竈ではすぐに葉がだめになるが、この枝は一週間以上元氣だった。

父、仙齋が続けてきた立花研修会を、今は私が引き継いでいる。立花には立花特有の花材の扱い方がありますが、私自身、その基礎が身についたと実感するまで何年もかかった。何でもそうだが、少しでも多くいける(立てる)以外に上達の近道はない。



京の町家で暮らしていると、時折ありがたいなと思うことがあります。

30歳もある長い石畳の路地に水を打つのは、小さな頃からの私の日課でした。ジョウロとバケツにたつぷりの水をくんで何度も往復します。お花のお弟子さんや客人のある時は、いつもこうやってお迎えするのですが、そのご褒美に爽やかな風が吹き抜けて行きます。それがとても気持ち良いのです。

それから3カ所ある水溜みづかきに

季節の花を浮かべます。季節ごとに花の種類も変わりますが、今なら鉄線てつせんや紫陽花あじふげでしょう。新しい水に入れ替えた水溜の浮かした花、暑さで元気がなくなっている、もう一度生き返って目を楽しませてくれます。

中京区に住まいしているので、お隣も裏もマンションやホテルに囲まれてしまっています。小さな庭ですが、目隠しするように木々が青々と茂っていてくれます。この美しい緑に清められた風が家の中を通り抜けて行くときには、この細長い町家の造りに感謝すること。

13歳で両親と離れ、この家で祖父母と共に暮らしてきま

町家に暮らすのありがたさ



くわはら・さくらこ 京都市生まれ。甲南女子大仏文学科卒。江戸時代前期より続く桑原専慶流のいけばなを15世家元の夫と共に継承する。料理研究家としても活躍。

した。お花の稽古を通して、物を大切に思う気持ちが何よりも強くなったと思います。

いけばなの家として毎日教室もあり、家族の生活もしています。家に来られた方にはお父の掛け花や床の間のいけばなを通して心地よい澄んだ空気を感じてもらいたいと

思いますし、同時にそうすることが私自身のリフレッシュにもつながります。路地に水を打った時のように、気持ちのスーッとします。

花と共に生きた祖父や両親の大変さやしんどさを見て育ち、少しでも手助けになればとやってきたことも今では日

常の何でもない習慣となり、これもまたご褒美なのだと受けとめています。

この家に住んで、家から学んだことも多くあります。

私にとって、いけばなは花との関わりを深めるだけでなく、暮らすのものであるとも考えています。「家が傷んでくる前に早く気づいて直さない」は母の口癖でした。毎日の暮らしに余裕がないとなかなか気づけないので、今でも手強い言葉です。

父は大工さんと良く相談し家の修理をして、古い物と新しい物を調和させ、美意識の高い住みやすい家にしてくれました。この家を大切に美しく暮らし、守っていくことも大切な仕事だと思っています。(華道桑原専慶流副家元)

【京都新聞6月23日①】
朝刊1面 カラー掲載

ビッグイシュー日本版 「生き残りのしくみ」③

前号で「多様な子孫を残すことが植物にとつての生き残り戦略」と紹介したが、その逆を行くのが性質を画一化した栽培作物だという指摘もなされていた。作物の疫病が大飢饉をもたらした事例も多い。大規模農業への警鐘ととらえることもできる。植物が本来持つてゐる生き残るための力を生かした多様な農業の価値を見直すべきではないだろうか。再び「ビッグイシュー日本版²¹²号」より生物学者田中修氏による特集内容の紹介を続ける。

毒による独自の護身術

「季節感を出そうとアジサイの葉っぱを食べ物に添えた飲食店で食中毒事件が起きたり、フランスではキョウチクトウの枝でバーベキューをして死者が出たり、またスイセンの葉っぱはニラと似ているため誤って食べて食中毒をおこす事例もあります」

アジサイの葉には青酸を含む物質が、キョウチクトウにはオレアンドリン、スイセンにはリコリンという有毒物質が含まれる。

虫や動物たちに食べつくされないようにとそれぞれ独自の構造の毒(有毒物質)を持つようになった植物。まさに彼らは「化学者」だ。

そんな植物の毒を逆に利用する動

物もいる。オーストラリアのコアラは、ユーカリの葉に含まれている青酸を無毒化する細菌を腸に棲まわせているので、ユーカリの葉をほぼ独占的に食べて生きていける。ただし生まれたばかりのコアラにはこの細菌はいないので、親の糞を食べて腸に細菌をとりこむ。

ヒトも植物の毒とは古より深く関わってきた。

江戸後期の外科医・華岡青洲は植物由来の有毒物質で全身麻酔をし、乳がんの手術を成功させたことで知られている。

ヒガンバナはよく墓地や田畑の畦道に植えられるが、これはヒガンバナに含まれる有毒物質リコリンによって、モグラやネズミを寄せつけなくするという先人の知恵。またヒガンバナの球根は水にさらして毒を抜けば食べられるので、作物の不作の年に飢えをしのぐ救荒植物としての役目もあった。

私たちは毒のある植物とともに生きる知恵を身につけた先人たちのおかげを多く受けている。

また野菜として出回っているものにも少なからず有毒物質は含まれている。例えばジャガイモの芽に含まれるソラニン、ギンナンのギンゴトキシシン、モロヘイヤの種に含まれるストロフェチジンなど。果物の女王マンゴーは種の周りの果肉にあるマンゴールが皮膚をかぶれさせるので品良く食べよう。(次号へつづく)



直心道場じきしんどうじょう

今は掛けていないが、長い間、家の玄関の間には「直心道場」の書が額装で掛けられていた。昔の「テキスト」を見返していて、家元宅での師範認証式の写真に写っていたので思い出したわけだが、書の意味について調べてみた。

もともとは「直心是道場」からとられていると思われるが、これは維摩経ぶいまきやうというお経の中に出てくる言葉である。

昔、光厳童子が毘耶離の城門を出て、閑寂の境に修行の道場を求めようとしていたとき、維摩居士ぶいまいまこしが城に入つて来るのに出会った。光厳童子が「どこからお帰りになられたのですか」と尋ねると、居士は「今、道場から帰るところです」とのこと、そこで「実は私は閑寂な道場を探しているのですが、居士が行かれた道場はどこにあるのですか、ぜひ教えてください」という問いに「道場は外に求むるに及ばぬ。直心是道場、虚仮なきが故に」と喝破されたという。

「素直な心に偽りは無い、そここそ道場はある」と言い換えることができると思うが、師匠も弟子も、この「素直な心」についてよくよく考えて稽古するならば、おのずといけばな心に近づけるのではないかと思う。さて、「花をいける素直な心」とは。自問自答中。



三種の花で

△9頁の花▽ 櫻子

アンスリウムと薔薇は一本ずつ、オンシジウムは二本使ってつけてみた。少ない数ほどまとめにくい。

薔薇一輪の葉を二段に分けて水際をきれいにみせる。薔薇を買う時は茎が太くて葉の生き生きしたものを選んで。日持ちの良いアンスリウムとオンシジウムも艶やかな薔薇の葉のお陰で元気に咲き誇る。

壊れそうなほどに薄く焼かれた白磁の花器。口元に繊細な絵付がされている。アクリル製の花台。

特別な花として飾りたい。

涼しげに

△10頁の花▽ 仙溪

「実の汁が服についたらとれない」雑草として子供の頃から知っていたが、近頃は実の青いうちに切り花で出回るようになった洋種山牛蒡。枝先には花から実になる過程も見ることができ、器にいけると野外で見るよりも涼しげに見えていい感じである。

ただし有毒植物なので、決して実を食べないように。特に幼児の手の届くところにはいけておかないほうがいい。

洋種山牛蒡はアメリカヤマゴボウとも呼ばれるように、北アメリカ原産の多年草（山牛蒡科）。久留米鶏頭と桔梗をとり合わせて、スウェーデンのガラス花器にアクリルの仕掛けをして剣山でいけた。



蒲がまの穂

櫻子

日本全土の池や沼に生息し夏に花を咲かせる蒲の穂。自然に生えているのを見ても美しいとは思わないが、水をたつぷり張った水盤にいけるととても涼しげな花となる。

雄花は黄色い花粉となって飛んでしまうので、雌花だけを残していきける。昔は因幡の白うさぎの話をしながら雄花穂を取ったが、最近の蒲は雄花穂が綺麗に取り去られている。さらに雌花穂の上の軸が切られていることもある。

今年の夏の稽古は雄花穂を観察したいからと、産地に連絡してもらい自然のままの蒲の穂をいける事ができた。

考えてみれば、日本神話に登場する蒲は1300年以上前から生息しているのだ。(古事記の成立は712年)そんな植物をいけばなでは大切にしている。

蒲と小蒲は、上の雄花穂と下の雌花穂がくっついているが、姫蒲は雄花穂と雌花穂が離れて付いている。きちんと距離を置いているのだ。昔の人は良く観察して名前をつけている。

花材 蒲(蒲科)

オンシジウム(蘭科)

紫陽花(紫陽花科)

花器 ガラス鉢



バターのお店 櫻子

フランスの伝統発酵バター「エシレ」のクッキーを頂いた。

京都では買えない珍しいお菓子。箱があまりにきれいなので、おとしを入れてカラーとカラジウムをいけた。

もったいないからと仕舞い込んでしまえば、そのまま忘れてしまうだろうし、捨てるのも耐え難い、花をいけることで、心に留める事になる。「軽やかなゆきすりの意匠花」と表現したのは祖父だった。

1973年のテキストに「アダム&イブ」のショッピングバックにフリージアをいけていた。この店はずち吉の洋食器部門で、最初京都にオープンした時は、憧れのショップだった。まだ外国からの洋食器が少ない時代、花を飾りテーブルセットイングしてのディスプレイは珍しかった。

祖父の時代も今も変わらない。京都人は特に新しい物が好きだが、祖父も私も同じだ。

私の頼りない文章に十三世専溪の言葉を。

「この様な意匠花も繰り返し返せば鼻につく。が、こんな瞬間的な思いつきはいけばなのある部分にはいつも必要とされている。こんな風を利用することも考えるといけばなも又楽しむということになります。」

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
9月号
No.603

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





暑さを乗り越えて

△表紙の花▽ 櫻子

今年も切りたての新鮮な葡萄ぶどうを送って頂いた。

すぐに食べてしまうのは勿体無く、撮影してからという事になる。

両親も色んな生り物を花と合わせていた。柏葉紫陽花かしわばしやうがと葡萄、バナナとカラジウムなど上手い組み合わせが沢山あった。

いけてから頂戴するのが桑原家の常でした。

今回はあかのまんまの仲間、大毛蓼おおけだと取り合わせた。葡萄と大毛蓼、同じ季節で同じ場所にいたかもしれない顔見知り同志。暑い夏を元気に乗り越えてきてくれた。

あかのまんまは別名犬蓼いぬたでという。辛みがなく食べられない蓼の意味。犬の字がつく植物には他にも、犬胡麻、犬辛子、犬薺いぬなすな、犬神いぬひえ、犬蔵いぬくらびというものもある。どれもみんな食べられない。

花材 葡萄(葡萄科)

大毛蓼(蓼科)

花器 陶水差し(インドネシア)

雪笹 △2頁の花▽

櫻子

山野草は中々見る機会が少ない。咲く場所を選び、決まった季節のほんの短い間しか咲かない花は名前も美しいものが多い。

誰がつけたのか、よほど考えられた



のだろう。雪笹も山地の林の中に生えていて初夏の頃花を咲かせる。白い小花を雪に、葉を笹に見たてて、この名前がついた。

花の後は赤くて小さな実ができる。実は小豆に似ていて、葉も湯がいて食べると小豆のような味がするので小豆菜ともいうらしい。

秋の黄葉した雪笹を女郎花おんななましと取り合わせた。

花材 雪笹（百合科）

女郎花（女郎花科）

花器 染付広口花器

大手毬おおもでまり

〆3頁の花〴

仙溪

この花の撮影は8月9日で連日の猛暑が続いていた。その3日後には四万十市で41度を観測している。そんな厳しい暑さの中で9月号を撮影していたのだが、比叡山麓の谷間にある畑では大手毬の鉢が紅葉したとのこととで、花屋さんが鉢を山から下ろしておいてくれた。

そんな貴重な葉色に優しく寄り添ってくれる花として、橙色の鶏頭けいとうを選んだ。

花器には白と黒のモノトーンの花瓶を選んで繊細な秋色を引き立てている。酷暑の中でも花を飾ると元気になる。

花材 大手毬おおもでまり（忍冬科）

鶏頭けいとう（寛科）

花器 白黒陶花瓶（近藤豊作）



石のような器 仙溪

作例の実のなつた枝は花屋ではカリンの名前で売られていたが、カリンの実は緑色で大きくてすべすべな印象があったので調べてみたところ、マルメロではないかと思う。

マルメロは中央アジア原産の落葉高木で、果実は白い細かな毛でおおわれている。カリンと同様に果実には芳香があり、果実酒やジャムにされる。

ツルランは東南アジアから日本（九州南部、南西諸島）、中国、台湾、オーストラリア北部に分布する蘭の仲間。エビネの一種である。

多くのエビネが春に開花するのに対してツルランは夏に開花する。花姿が鶴に似ていることから、ツルランと名づけられ、一般的には白花が多い。広葉樹林下の林床に地生し、群生して咲く。

これら個性的な花材の組み合わせを受け止める器として、石のような青い陶花器を選んだ。文人花的な好みがいけいな。

花材 マルメロの実（薔薇科）

鶴蘭の赤花（蘭科）

花器 トルコブルー陶花器

【記録】

祇園祭にいける

会期 7月15日(月)～17日(水)

会場 京都四条通

協賛店舗ウインドー

出品 桑原仙溪

「ない藤」履き物店

花材 七竈 檜扇 桔梗二色

鉄線 (写真②)

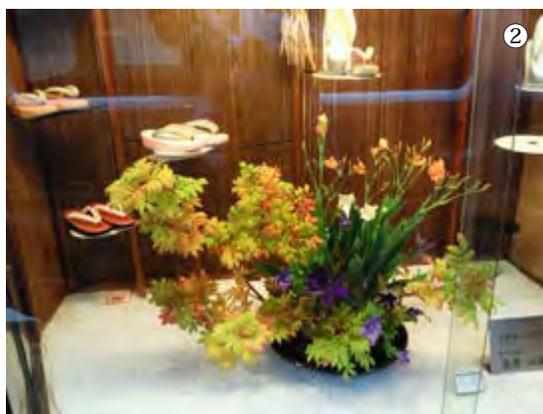
祇園祭山鉾巡行

私の住んでいる町内では、祇園祭の山の一つを管理運営している。山の名前は「浄妙山」。平家物語の宇治川橋合戦の様子を再現した山である。

今年は何年にも一度まわってくる行事役で、さまざまな仕事をこなした。合戦縁の以仁王の陵墓へお祭り中の無事祈願を兼ねての墓参もその一つで、千年の時間の流れを実感できる。

7月17日、巡行当日は健一郎 順之助と三人でお供をした。人々の無病息災を祈って。

(写真①)



京都新聞 8月21日朝刊

「くらし塾・食卓を楽しく」

一工夫で普段の食事に彩りを

桑原櫻子

「食卓の花は雰囲気をやかにしてくれるし、卓上をきれいにしようという気持ちを起こさせてくれる」 「緑が多いほうがホッとするし、食事もおいしく感じられる。



る。花は差し色程度に」 「食卓に花はあるほうがずっといい。果物も野菜も花になります」





蓮の立花

8月18日、岡山の上野淳泉先生指導による流枝会「蓮の立花研究会」に参加させていただいた。

まずは早朝5時より手分けして2カ所の蓮田で花と葉を切り、水につけて会場へ移動。専用のポンプで水揚げののち、茎に針金を入れながら立てる。午前1時には全員立て終えて、午前中の鑑賞。

蓮は二人一組になって茎の切り口からポンプで水を送り込んでいけるのだが、水が葉脈に入ってゆく様子がはっきりとわかって面白い。できれば水中にあった部分を残していけたほうが水揚げがいいようだ。私の作例でも真の一番背の高い葉が長持ちしていた。

上野先生からは長年の経験で身につけられた蓮の出生について、いろいろと教わる事ができた。いわゆる口伝の部分である。ご自分で見つけられたものもあるとのこと。教わり、身につけ、見つけて、伝える。集い、いけてこそ味わえる体験であった。



立花時勢粧より

貞享五年（二六八八年）刊行の「立花時勢粧」草の部の中の「蓮」について書かれたとこ

ろからその一部を紹介しておく。

流枝会研究会では十五瓶の蓮の立花が立てられた。当日撮影した順に掲載します（6〜7頁）。



「立花時勢粧」（1688年）より 蓮一色

一、蓮花は水中出生の物なれば草木に立ませずは池中の景気瓶上にうつらぎるゆえ一色物ならでは立る事なし。然れども蓮花一色にて立るを真の一色といひ、水草を立まじゆるを草の一色と云う。

一、蓮に立ませず苦しからざる物、芦、蒲、つくも、杜若、河骨、一切水草のたぐい之を用ふ。又古来菊を前置に用ゆ。水に縁ある故か。このほか陸物に立ませざる流儀も有といへども花道の正理にあらず。

一、蓮の一色立んとおもはば、自ら池辺へ行きて、開き葉、中ひらき、巻葉、やれ葉、こげ葉、蓮肉、花は赤白、或は茎風流なるを見立て切るべし。



蓮の茎に入れる針金は10番、12番などの太い針金が必要で、長さも1m20cm以上ないと真の葉などは長さが足りない。そのような真っ直ぐの針金は巻きで買って自分で伸ばしてつくることになる。そんな作業もまた楽し。



ビッグイシュー日本版 「生き残りのしくみ」④

父も以前、テキストで書いていたが、花の色にはそれなりの理由があるのだ。先月につづいて「ビッグイシュー日本版21号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

太陽の光とたたかう

植物は太陽が大好き！と思いがちだが、実際にはまぶしすぎる太陽の光に対しての防御手段もとっているのだ。

「昼間の太陽はだいたい10万ルクスの明るさがあるんですが、光合成する材料となる空気中の二酸化炭素が0.04パーセントしかなくて、せいぜい3万ルクスぐらいしか使えない。残り7万ルクスのエネルギーは行き場がなくなってしまう、酸素と反応して活性酸素が生まれてしまう。」

「植物に紫外線が当たったら、猛毒の活性酸素が生まれます。たとえばオキシドールという消毒液がありますが、あれは過酸化水素水で活性酸素のごく薄い液ですが、それで菌が死ぬ。パラコートという除草剤も、活性酸素で植物を枯らします。」

この猛毒の活性酸素に対抗するために、植物は自分で「抗酸化物質」をつくっている。その代表がビタミンEとビタミンCで、これらが活性

酸素を消してくれる。

また、植物が咲かせる「花」の色も抗酸化物質と関係があるのだ。もちろん受粉のために昆虫や鳥を呼び寄せる目的もあるが、同時に紫外線対策のためでもある。

「植物たちは太陽の紫外線が降りそそぐ中で成長し、花は子孫をつくります。花の中で生まれてくる子どもたち、つまりタネを守るため、アントシアニンとカロテンという二大色素を使って活性酸素に対抗しつつ花びらを美しく装っているんです。」これらの二大色素は典型的な抗酸化物質だ。

バラ、アサガオ、シクラメン、サツキツツジなどの花はアントシアニンという色素で装っている。これは赤と青の花を咲かせる。

キク、タンポポ、マリーゴールドなどの花はカロテンという色素で装っている。これは赤や橙、黄色の花を咲かせる。

紫外線が強く、強い光のところで、花の色や果物の色がどんどん濃くなるのも植物の防衛本能のあらわれなのだ。

私たち人間も紫外線に当たったりすることで活性酸素が発生するが、果物や野菜からビタミンCやEをとることで対抗できる。またブルーベリーのアントシアニンは目にいいなど、さまざまな植物の能力の恩恵を受けている。植物の働きぶりに感謝しなければならぬ。(次号へ)



二種でいける 仙溪

今月の「テキスト」に掲載した8作（蓮の立花をのぞく）はすべて二種の花材でいけている。

普段の稽古では三種類の花材の組み合わせでいけることが多い。主材となる枝に花をとり合わせて、さらに小花をもう一種という感じだ。三種類目の花材で色彩を深めたり補ったりする。あるいは季節感を強めたりもできる。

三種のいけばなが身につけてきたら、二種でいけてみるといい。

二種の花材だけでいけようとする、花器の選択が三種よりも難しいと感じるだろう。またいけ方も高度な技量が必要になる。二種でも見応えのあるいけばなにするには相当工夫しないといけない。とてもいい勉強になる。

メギ

仙溪

小さな葉が色づいている枝は目木である。葉の落ちた枝をよく見ていただくと、枝に細く鋭い棘がいつぱいついているのがわかると思う。この花をいけたあと、指に棘がささっていた。

目木の枝の動きにあわせて自然体で花瓶にとめ、枝の隙間に黄菊をのぞかせた。かなり前後の奥行きをつくっている。

花材 目木（目木科）

菊（菊科）

花器 トルコブルー陶花瓶

蝦蔓 えびづる

櫻子

表紙には大きな葡萄の房をいけたが、こちらには葡萄のような実がぶらさがった野生の蔓をいけた。どちらとも太陽が育んだ結実。

この小さな黒い実はエビヅルで、ノブドウやヤマブドウなどとともに古くからエビカズラとも呼ばれ、日本に自生する葡萄の仲間。エビヅルとヤマブドウの実は食べられる。また、古事記にも登場する、日本古菜

の植物である。イザナギノミコトが黄泉の国から逃げ帰る時、追ってきた鬼にエビカズラを投げつけて、鬼がその実を食べている時に難を逃れた。エビヅルに含まれるポリフェ

ノールは普通の葡萄の数倍、酒石酸は血を増やしたり滋養強壯作用があるとされている。鬼もこの実を食べて力が湧くのを知っていたのだろう。自然の野山は、太古につながる植

物の宝庫だ。

花材 蝦蔓(葡萄科)

紐鶏頭(竟科)

花器 鶴首陶花瓶(清水正次作)



仙齋リリイ

仙溪

二年前の流展「花を詠む」で父が
いけたガイミアリイ。父はその前
の流展（2001年）でもこの花で
立花を立てている。
ガイミアリイはオーストラリア

南東部の沿岸地域に自生する常緑多
年草で、竜舌蘭科。学名ではドリ
ア・エクス・セルサと呼ばれ、槍の
花という意味がある。
1mほどの剣のような硬い葉が放
射状に出て、その中心から春と夏に
最高6mの花茎を真っ直ぐのぼした

先に花をつける。
二度、流展で父のためにこの花を
集めてくれた花屋さんか、初盆のお
供えにと持って来てくれた。
とにかく背が高く茎が太い。ま
で魔法使いが持つ杖である。この
花の力で世の中の理不尽をすべて

解決できそうなくらいの存在感であ
る。天国の父もこの花を持って立ち
嬉しそうに笑っているだろう。
ピラミッドアジサイをとり合わせ
て、とっておきの花器にかけた。こ
の花器ならガイミアリイの重量も
大丈夫。数日後に密をたっぷり溜め

た数輪の花が咲いた。
花材 ガイミアリイ
（竜舌蘭科）
ピラミッドアジサイ
（紫陽花科）
花器 細口陶花瓶
（宇野仁松作）





木の器 櫻子

マンゴーの木をくりぬいて作られた器。タイでつくられたものだ。マンゴーは漆科の常緑高木で樹高40m以上にもなるそう。あの赤い実を無数にぶら下げた大木は圧巻だろう。ぜひ一度見てみたいが、開花後には強烈な腐敗臭がするとのことなので、実ばかりになった頃合いを調べてからがいいだろう。

マンゴーの原産地はインドからインドシナ半島周辺と推定されている。インドでは四千年以上前から栽培が始まっており、仏教の経典にもその名が見られる。マンゴーをよく食べるようになった現代の若者(10〜20代)世代をマンゴー世代と呼ぶそうだが、その名にあやかってマンゴーのように遅しく、たわわに美果をみらせてほしいと切に願う。

そんなマンゴーの幹をくりぬいて作られた器に、深紅の毬栗のようなベニノキと黄金色のマリーゴールドをいけた。麻で織ったオレンジ色の敷物に飾ってタイ風供花といったところか。マンゴーの大木を想像しながら見ると、趣も増してくる。ちよつと高いが、真っ赤なマンゴーも買ってこようか。

花材 マリーゴールド(菊科)

メキシコ原産

紅の木(紅の木科)

熱帯アメリカ原産

花器 マンゴー製鉢

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
10月号
No.604

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





七竈 ななかまど 鳥兜 とりかぶと 竜胆 りんとど

△表紙の花▽ 櫻子

紅葉した七竈の葉が、斜め後ろからの光を受けて鮮やかに浮かび上がる。

竜胆の純白と鳥兜の優しい青紫色が、七竈の色彩のうつろいを際立たせる。

奥行きのある葉の重なり。伸びやかな花。家にながらこんな風景を目にできることなんと贅沢なことだろう。

花を育てる人、大切に届けてくれる人器をつくる人。永い歴史のなかで培われた豊かな文化。

古の人たちはどんな思いで花をいけていたのだろう。

自然との一体感。
もてなしの気持ち。

木々や草花への敬いの心。
なによりも、器の上でにつこり笑ってくれたように感じられたときの、あの爽やかさ。

うまく言葉にできないけれど、花たちへの感謝をこめて、写真で残しておこう。

器材 七竈 (薔薇科)

鳥兜 (金鳳花科)

竜胆 (竜胆科)

花器 陶花瓶

△2頁の花▽ 櫻子

晒菜升麻はキンポウゲ科の植物で山中の林下に生える。高さが一メートルにもなり、白い花が長いブラシの様に咲く。

若菜を茹でて水に晒して食べるので晒



菜。根の部分は升麻と呼ばれる漢方薬になる。まさに自然の恵みを与えてくれる植物だ。

晒菜升麻と取り合わせた丸葉の木や竜胆を格の高いものにしてくれる。

いけばなとしていける事が第一義なのだと思わせる花だ。

花材 丸葉の木（満作科）

晒菜升麻（金鳳花科）

竜胆（竜胆科）

花器 陶水盤

蒲^{がま} 鶏頭^{けいとう} 菊

△3頁の花▽ 仙溪

鶏頭の鮮やかな赤色。茎が太くて花も不定形で大きい。虫に食べられていない葉がたつぶりついているのは、とても大切に育てられたということ。こんな花をいけられることに感謝である。

蒲は日本全土の池や沼に生え、「古事記」に出てくるほど太古からの馴染みの植物だ。菊も鶏頭も古くから馴染みの花だが、もともと菊は中国、鶏頭はインドの植物。私たちがいけて楽しんでる花や木の来歴を知ると、世界の国々を身近に感じることができて楽しい。

もし鶏頭が日本に伝わっていなかったら、、はたしてどんな花をここにしていただろう。

花材 蒲（蒲科）

鶏頭（寛科）

菊（菊科）

花器 陶鉢



貝塚伊吹

仙溪

花型 行の花型

花器 煤竹竹筒

「伊吹」は松科・柏槇属（伊吹属または鼠刺属）の常緑高木で、針状の葉を持つ。

生花の稽古には「貝塚伊吹」がよく使われるが、これは伊吹の変種で葉の先は丸みがあつて手に優しい。貝塚伊吹を伊吹と呼んでしまつてゐるので、混同しないように注意したい。

花材となる伊吹の仲間には、立柏槇、這柏槇（磯馴）、杜松（鼠刺、ねず）などがあるが、父は杜松を好んで立花によく使つてゐた。いかにも仙人が住んでいそうな雰囲気の木である。

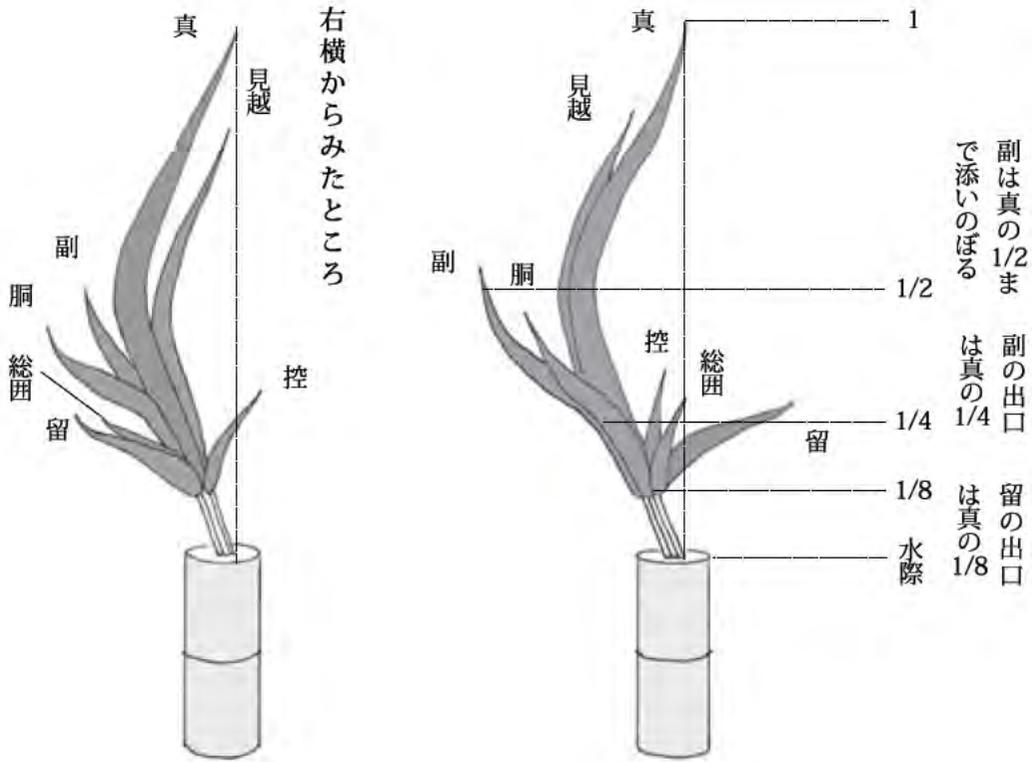
花展には立柏槇や這柏槇を使うことが多いが、手袋をはめていけないと、痛くていけない。

生花の基本花型の解説にと、貝塚伊吹7本を使つて7体の役枝をつくり、行の花形に付けている。

左頁にそれぞれの役枝の長さや形を図解してみたが、あくまでも誰でも解るようにと長さや出口の基本を示している。これを基本にしなから花材それぞれの出生や特徴を生かす微妙なさじ加減は先生から随時教わるようにしてほしい。

真の全長を量（京量）の幅で測ることもできる。（およその目安として）

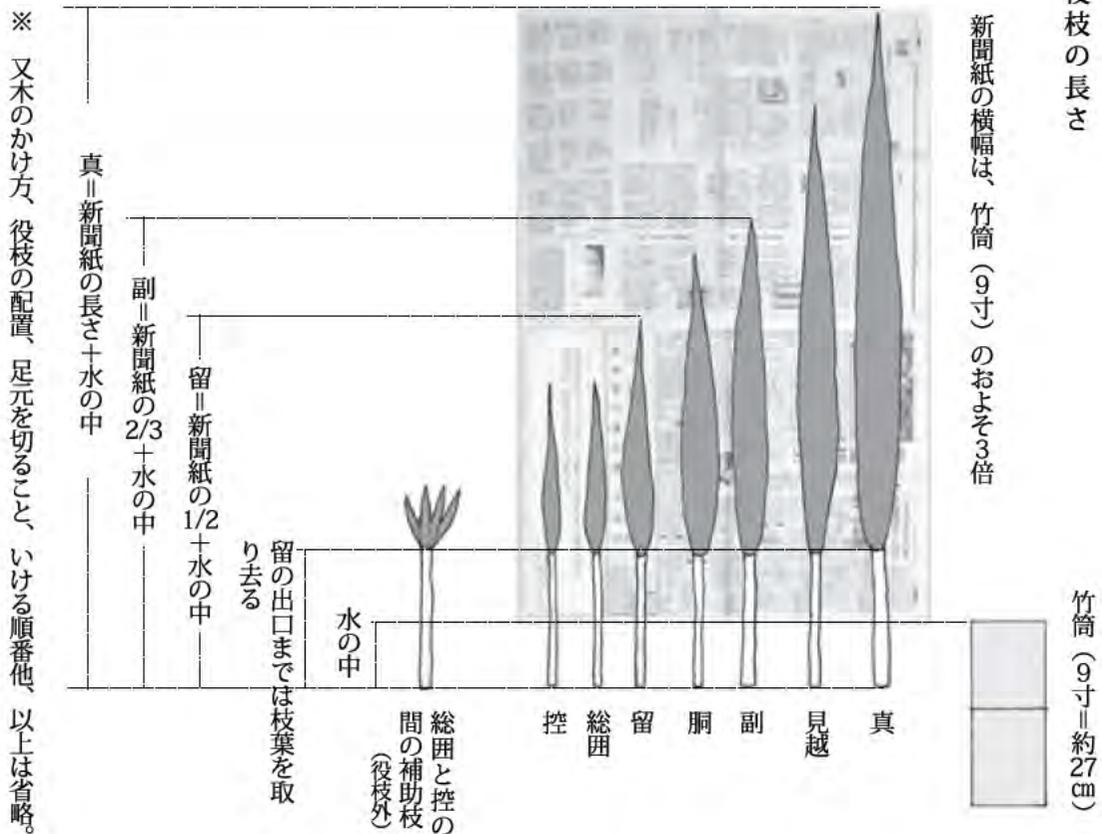
貝塚伊吹の生花（七体） 行の花型



副は真の1/2まで添いのぼる
 副の出口は真の1/4
 留の出口は真の1/8
 水際

右横からみたところ

役枝の長さ



新聞紙の横幅は、竹筒（9寸）のおよそ3倍

竹筒（9寸≒約27cm）

※ 又木のかげ方、役枝の配置、足元を切ること、いける順番他、以上は省略。

ビッグイシュー 日本版

「生き残りのしくみ」⑤

先月につづいて「ビッグイシュー 日本版21号」より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。

逆境を生きのびる術

暑さに強い植物は体を冷やす工夫をし、乾燥地の植物は水分の蒸発を少なくする工夫をし、寒さに強い植物は凍りにくくする工夫をしている。

「夏に育つ植物たちは、私たちが汗をかくのと同様、同じ仕組みで、葉っぱの気孔という穴から水を蒸発させて体を冷やしています。」

「ですが、サボテンなどの多肉植物は乾燥した砂漠地帯出身なので、水の蒸発を防ぎたい。だから、夜の間に気孔から二酸化炭素を取り込み、葉に蓄えて日中の光合成に備え、昼はなるべく気孔を閉じているんです。そうやって水の消費を節約して生きています。」

「寒さ対策は、まず凍らない性質を身につけないといけません。ですから、常緑樹なんかは冬に備えて少しづつ少しづつ糖分などをからだに備えていくんですよ。」

「寒い冬を通り越した大根、白菜、キャベツは甘いと言われますよね。ハウスのホウレンソウも出荷前に

一定期間寒風にさらして甘みを増すそうです。栗なんかは冷蔵庫に置いておくと甘くなるんですよ。」

「猛暑が苦手な植物は春に花を咲かせて枯れ、夏はタネという形でやり過ごす。極寒に弱いものは秋に既にタネになっているのです。」

植物は日々の糧を手に入れるために

独特の進化を遂げたものもある。

ハエトリソウは北アメリカ出身で、窒素などの養分をあまり含まないやせた土地だったために、虫のからだから窒素を含んだ物質を摂取する能力を身につけた。

「そのままではどうしてやせた土地で生きていくのか?と思われるかもしれませんが、でもやせた土地だと、他の植物は棲めないため、競争がない。だから、こういう能力を身につけてでもハエトリソウは、この地で生きていくことを決めたんでしょうね。」

ネナシカズラは根がなく、他の植物の茎に巻きついて吸い付くように突起が伸び、その植物から栄養を奪う寄生植物。

「でもネナシカズラは決して宿主が枯れるほどには栄養を奪わない。自分の生き方を知り、わきまを心得ている。」

ピーナッツは南米、ブラジルあたりが原産で、河原近くの砂地を好む。かさかさの殻はなんのため?。

「大雨の後で増水すれば、他の植物は流されまいとするんですけど、ピーナッツは『チャンス!』とばかりに流されていくんです。あのサヤはカサカサなので、水に浮かぶでしょう。そして、流れ着いた新天地ですぐすくと生育していきなす。そうして生育地を広げて生き抜いてきました。」(次号へつづく)



庭に白花の彼岸花が咲きました



桑原家の人気者 猫のレモン君

巖俊さん 26才

この中国人留學生の名前を記憶にとどめておきたい。この文章を書いている。彼は9月16日の夕刻、高槻あたりの淀川で、濁流にあやまって落ちてしまった6才の子供を、自らの危険も顧みずに川に飛び込んで助け出した。子供も巖俊さんも無事だったが、もうすこし遅ければ子供は命を落としていたところだったそうだ。

「大人として必ず助けなければならぬ」と思いました」

坊主頭に眼鏡をかけた実直そうな巖俊さんは日本語でインタビューに答えている。「これからは日本の発展の経験を勉強して中国に帰って頑張ります。日中間係が良くなるために頑張ります」

16日といえば前日から大雨で、未明から嵐山渡月橋付近が冠水するなど各地で被害がでた日である。すでに雨は止んでいたけれど、助けることだけを考えて、茶色い濁流に飛び込んだ巖俊さんを讀みたい。

上海出身で中国の大学を卒業し、3年前に経済学を学ぶため来日、来年春から大学院の博士課程へ進むことになっているそうだ。

桑原専慶流の流祖、仙溪の「富春軒」の軒号は、中国後漢時代の文人「嚴子陵(巖光)」が好んで

住んだ富春山からとったのだろうと父は言っていた。巖光の高尚な氣風を慕う文人も多く、政治よりも自然や人の営みに輝きを求めるような人であったそうだ。

巖光と巖俊くん。名が同じというだけで何か繋がりを感ずる。爽やかな志の持ち主という点で、自分の中では関連づけて記憶にとどめておきたいと思う。

「義を見てせざるは勇無きなり」





躑躅^{つづじ}

仙溪

躑躅の生花は枝が折れやすいので骨が折れる。水際で枝どうしを添わせるのもひと苦労である。花屋によく締まった躑躅の太枝があったので、二本を買い求めて生花をいけた。

花屋では霧島躑躅ではないかとのことだったが、躑躅は花の時期でも判別が難しい。ただ、よく見ると春でもないのに若葉が芽吹いているので、山躑躅の系統だと思われる。山躑躅は春と夏に葉が生え替わる性質があるそう。霧島躑躅も山躑躅の系統である。

日本はツツジの国と呼んでもいいくらい多くの自生種と園芸品種があり、その栽培の歴史も古い。元禄5年(1692年)には江戸染井村の伊藤伊兵衛がツツジとサツキの専門書「錦繡枕」を出版して、そこには170を越える品種が紹介されている(ちなみに国立国会図書館の公開デジタル資料としてインターネットで閲覧できる)。「立花時勢粧」が出版された4年後にそれだけの書物が編まれていることを見ても、江戸時代前期には、かなり園芸が盛んであったことが想像できる。

しかし躑躅の良いものはそんなに多く出回らない。優れた育種技術をもった産地が増えることを望む。





檜扇の実 ひおうぎ

〈10頁の花〉 櫻子

檜扇の実は和花とも洋花とも相性がいい。

この明るい緑色にふくらんだ実は、やがて茶色く枯れて割れると中から漆黒の丸い種子が並んで現れる。この黒い種子は「ぬぼたま」「うぼたま」と呼ばれる。射干玉、烏羽玉と書く。万葉集には81首も詠まれているくらい好まれたことが伺える。艶やかな黒い色に、小さいのに強い個性を感じる。

作例ではまだ若い檜扇の実の爽やかさに深紅の薔薇と赤い縞模様のアンスリュームをとり合わせた。花器は衝立のような平たい形で、小石を入れた上に細長い剣山を置いていけている。

日本古来の植物と、熱帯の個性的な花と、赤い薔薇。色彩と花の形で選んだ感覚のないけばだが、不思議と調和している。

こんな出合いを楽しむのもいいかなの面白さだと思う。

盛りだくさんのお買物

〈11頁の花〉 櫻子

京都市左京区鹿ヶ谷特産なので鹿ヶ谷かぼちゃという。

瓢箪のかたちをした南瓜で、上の部分は繊維が多く水っぽいのでスーブなどにする。



下の方は普通に炊いたり、丸ごと詰め物をしてオーブンで焼いても美味しい。上と下の調理方を変えなければならぬ、少し手間のかかる野菜だ。だから中々食べられない。京都の人でも食べた事のある人は少ないと思う。

今年は岡山で作られた鹿ヶ谷かぼちゃが届いたので早速奥の座敷に飾らせてもらった。

いっお料理しようかと悩んでいたら、花屋さんで角のようになったオクラと黒い唐辛子（ブラックフィンガー）を見つけた。どちらも鑑賞用なので食べられないが、愛用の買物籠に盛り込んだ。私の普段のお買物は、食べ物を買う量がとても多い。

気がつくとも袋からはみ出して持てない状態にまでなっている、それをいけばなで表現しよう。

料理の連載をしていた雑誌でピツタリと思うようなイラストを描かれたこともあるくらい。

花材 鹿ヶ谷かぼちゃ（瓜科）

ザクロ（柘榴科）

オクラ（葵科）

黒唐辛子（茄子科）

葉鶏頭（寛科）

花器 エコクラフトの買物籠





出合い花 (1)

仙溪

投稿お待ちしています

皆さんはいけばなの「出合い」を楽しんでいますか？

先月号では二種のとり合わせでいけたが、花材の出合い、器の出合いをとても意識した。

いけばなの稽古では先生が花を用意する。できるだけ状態のいい、できれば季節の花材を、毎回違うとり合わせで用意するのはなかなか骨が折れる。でも自分が考えた組み合わせでいい感じのいけばなになったときは素直に嬉しい。花屋さんにも感謝である。

普段、家に花をいけていて感じるのは、花材の「出合い」が生み出す新鮮な美しさだ。なにげなくとり合わせた花が輝きを発することがある。もちろん「器」との出合いも大切な要素だ。飾る場との調和も大事。花と花、花と器と空間の出合いを楽しむ気持ちを持ちましょう。

この頁の作例では、ある花材一本に、別の花材一本をとり合わせていけることで、「出合い」が際立ついけばなにしてみようと試みた。たった二本のいけばなだが、異なる植物同士を「寄り添う」ようにいけることで、ささやかではあるが微笑ましい情景が生まれた。

花同士が寄り添う姿の清々しさ。私たち人間も、拒絶や対立や見て見ぬ振りではなく、もっと寄り添う気持ちを大事にしたいですね。

そんなわけで、流派のホームページで「二本で寄り添う『出合い花』(仮称)」を投稿してもらえるようにしようと検討中。その節には皆さんの気持ちがかめられた、ほのぼのとしたいけばなの投稿を楽しみにしています。

花材 屋久島木萩(豆科)

二輪菊(菊科)

花器 陶湯呑(清水卯一作)

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
11月号
No.605

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





出合い花 (2)

表紙の花 仙溪

先月号で2本だけでいける「出合い花」をいけてみよう!と書いたが、是非みなさんもいけてみてもらいたい。

あまり考えすぎず、直感をたよりにして手にした花をいけてみる。

花材にもよるが、普段の稽古用の器ではなくて、いつもはそのまま棚に飾っているような小ぶりの器に、小さめにいけてみてほしい。はじめから小さくいけるのは勇気がいるけれど、小さくしてこそ生かせることもある。

黄金色の薄の穂に、鉢植から切った秋明菊を添えて、小さな口の丸い器にいけた。この器の胸はえくぼのようにへこんでいる。

お月様へのお供えのイメージ。

花材 薄の穂 (穂科)

秋明菊 (金鳳花科)

花器 陶壺

喜樹 2頁の花 櫻子

数十年ぶり蔵や花器置場を整理して久しく使っていない花器が沢山出て来た。9月号のテキストから順番に花をいけている。

この三彩の壺は祖父も母も好んで使っていた記憶があるが、いけにくいのか、いつも奥に仕舞われてしまっただけで出てこない。剣山も入らないくらい口が小さいのに水盤のように浅く平たい。大きな枝のかんれんぼくをいけるのは難しかった。



た。しかしいけ終えてみると、二種の枝ものと大輪の薔薇に負けない強い壺だなと感じる。口が小さくても少しだけ花をいけて満足する性分ではないので困るところだが。

中国原産のカンレンボクは秋になるとミニバナナをつけたような球形の集合果となる。

果実、根、茎葉に抗癌効果があり、葉用とされてきた。それで英名は cancer treeとかhappy tree というのだ。中国では実の形から子孫繁栄を表す喜びの木ということで喜樹と呼ばれている。意味は違っても希望を与えてくれる木であったのだと思う。

花材 早蓮木(沼水木科)
丸葉の木(満作科)

薔薇(薔薇科)
花器 陶扁平壺

トゲのない薔薇

△3頁の花▽ 櫻子

今年の鈴薔薇の実も野薔薇の実よりも早く出回ったので、花会やお稽古に何度もいけさせてもらえた。野生の薔薇の実なのに年々棘が減って、扱いやすくなってくるのは有り難い事。

木苺は同じバラ科の植物。鈴薔薇の葉は取られているので必ず艶やかな緑を添えたい。ネリネの花も茎も瑞々しさを与えてくれる。

花材 鈴薔薇の実(薔薇科)

木苺(薔薇科)

ネリネ(彼岸花科)

花器 あげび籠



アブラドウダンの立花

仙溪

この立花の真と請に使った枝は、ここ数年、アブラドウダンの名前前で出回るようになったもので、葉の表面に微かな光沢があり、互生する葉は枝先に集まるので輪生しているように見える。細い枝であるが、水揚げがよく、色づいた葉は二週間たった今も元気である。

夏頃の稽古でいけた時には花が咲いていたが、ドウダンツツジの花には似ていない。



バイカツツジの花
参考 (<http://blog.livedoor.jp/tada170302/archives/5701634.html>)

調べてみると、これはバイカツツジであるらしい。バイカツツジがアブラドウダンの名前で流通しているようである。

バイカツツジは躑躅科・躑躅属の落葉低木で（ドウダンツツジは灯台躑躅属）、山地の林縁に生育する。水揚げがよく、葉に油を塗ったような照りがあるので、花材となったのだろう。きつとこれから花材として定着すると思う。

細枝は慎重に扱わないと折れてしまっているので注意したい。

流枝（やや後方）

請（やや後方）

見越（後方）

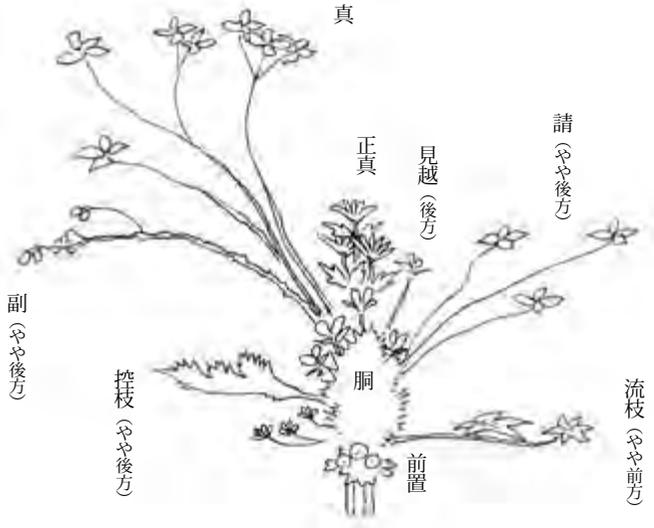
正真

真

前置

控枝（やや後方）

副（やや後方）



流祖の時代より

近松門左衛門

「聖徳太子繪傳記」

近松門左衛門は、江戸時代に上方（京都・大坂）で活躍した人形浄瑠璃の作者である。承応二年（一六五三年）から享保九年（一七二四年）までの七十二年の生涯で、百作以上の浄瑠璃を執筆し、歌舞伎にも作品を残している。

浄瑠璃の一つに「聖徳太子繪傳記」というのがあり、その中に立花が出

用明天皇の皇子として生まれた聖徳太子は仏法に帰依し、排斥派の物部守屋の母が仏法をのしつた時不思議を見せ、改心させる。母は自害して守屋を仏法に入るように勧めるが、守屋は拒絶して反逆し、太子方と争う。帝や北の方を奪い幽閉などした守屋を、太子は河内国稲村城に攻めて、これを滅ぼす。（以上、廣田隼夫氏のHP「近松門左衛門」で「ごまーい」より転載）

さて、立花のくだりは、物部守屋の母が、息子の守屋に自分の仏法への改心を受け入れさせる方法として、聖徳太子から「毎月六齋日、草木の花を瓶に活け、諸天に祭り供養せよ、凡そ立花の功德には、草木成仏の因縁花散り葉落るにも聲聞無常の悟あり、粧ひ立て色々に咲き匂ふ花を見る時は、濁る心も清やかに怒りなく恨みなく天人の歡樂花にあり、いかに放逸の守屋も花には心やはらぐべし、その時出家の姿を見せ、仏道に誘引せよ」と教えられ、はたして守屋は立花の会のようなものを催すこととなるのだが……。

あしの心、柳の副、前置に寒菊
正真の鶏頭に少し色を持たせてし
やれ、木の取合せ、
南天の心、正真のしをん、りん
どうのあしらひ、胴にいぶきのう
つりのよき、

松の心、正真の燕子花、枇杷の
葉をつかふたり、控の柏梅戻の受
見越の檜葉
青葉まじりの紅葉の心、なかし
控の取合、正真の菊、どれもどれ
もよう出来たとほめ嘸す、

そして「眞の立花」と題して次の
ような描写をしている。

是々御覽せ、是ぞ此神に向向の
眞の花の数、ゆがます直なる心の

竹を立初る一二の枝の房やかに、
茂る葉がさね呉竹の世々を重ねる
例也、正真は水仙に、陰と陽と
のつがひ葉は、ここに口傳と岩戸
を表し、めぐみの露を貝口にうけ
て、諸願も成就の神、影向の枝と
かや受そへは、残んの菊籬のもと
に手折りて、ゆうゆうとして南山
を見しは唐土日の本の、朝日の
てり葉、はまきして、君がため鐵
しつはりと挽める露に戀をもつ
しぐれも霜も降らば降れ、ながし
の松は深緑、じつと控の若緑、見
せばや鶴も我宿と、千代に八千代
に昔衣、哀れの枯木を胴つくり、
雪を出たる早咲の梅こそ谷のうつ
りにて、水際さまよき花の影、何に
譬へん唐絵の屏風よ、なぜなせた
てて見たれば面白や、木立枝ふり
つりもよく、峰を見こしの松の葉
に月をも宿す景色あり、木々も草
葉も縁切れず、夫婦の縁も結び合
ひ、長うそへとや副下にまくらか
り葉のしやがはねよげのあいし
らひ、おなじ青葉も濃き薄き、わけ
て浅黄と紺こんるりの葉がくれ
に、珊瑚の玉をもり上ぐる、おも
とは三がのまへおきに、口傳ある
ぞとしら玉椿、八千秋を祝ひこめ
野菊淨菊さし混ぜて左草とめ右木
とめ、雨露のそめ葉の芳しく、造
花の手業仇ならず、おのづからな
る風情には、見あぐる山の陰繁み
見おろす谷の奥深く、浅澤小野の
水わけて、千代を見せたる竹の節、

非常も心あり顔に、さしかこひた
る立花の作意、天も納受人衆みよ
うえん風流のもてあそび、月花わ
かぬもの迄も、あつと感じて詠め
けり、

なんと素晴らしい描写だろう。少
し意味のわかりかねるところもある
が、立花に対して造詣が深くないと
描けない文章である。聖徳太子の時
代はまだ立花は生まれていないはず
なので、近松の創作として歴史の中
に立花を道具として組み込んだもの
と思われるが、それにしてもこの詳
しさはどうだろう。

流祖、富春軒仙溪の「立花時勢粧」
が世に出た貞享五年（一六八八年）
には、近松三十五歳。同じ京都の地
で仙溪も近松も過ごしていたことに
なる。

その頃、立花の会が競うように催
されて、その評判を反映して近松は
立花を話に組み込んだのだと思ふ。
「立花時勢粧」もおそらく参考にし
たのではないだろうか。

人形浄瑠璃の演目に立花について
見事な言い回しがあれば、観客も
立花にさらに興味を持ったに違いな
い。立花の功德を聖徳太子に語らせ
ているところにも注目したい。

参考





ビッグイシュー日本版

「生き残りのしくみ」⑥

1951年、千葉県にある落台遺跡（縄文時代の船だまりと推測される）からハスの花托が出土し、植物学者の大賀一郎博士によってハスのタネの発掘調査が行われ、地下6mの泥炭層からハスのタネ3個が見つかった。

二千年前の弥生時代のハスのタネは、その年発芽して、翌年には美しい桃色の花を咲かせた。

植物の生命力の強さに脱帽である。

先月につづいて『ビッグイシュー日本版21号』より、生物学者田中修氏による植物のあれこれを紹介する。最終回。

命を次代につなぐ多様な工夫

二千年の眠りから目覚めた「大賀ハス」のほかにも、ツタンカーメンの墓から発掘されたと言われる「エンドウマメ」。弥生時代の遺跡で見つかったとされる「古代コブシ」。室町時代の遺跡から見つかった「ツバキ」や「シラカシ」などが息を吹き返している。植物の人生計画は無限のようにも思える。

「タネは発芽にもものすごく用心深いです。発芽には、温度・水・酸素の3条件が揃わないとダメだけれど、それに加えて70パーセント以上

のタネの発芽には光も必要。太陽の光の中でも光合成がしやすい赤色の光が当たるのを、ちゃんと感じてから発芽します。タネは慎重に、すごい能力を背負いながら命をつないできたんです。」

タネ以外にも植物は工夫をしている。「交配するために虫に来てもらうには、密や香りをつくるコストがかかります。いざというときにも子孫を残せるよう、保険をかけるように進化したのが『自家受精』できる植物です。例えばヌスミレには花が開かない蕾があつて、中ではいつのまにかタネがいついばいでできている。私たちが食べているお米や麦、大豆もそうした自家受精の性質を利用して品種改良したから、籾や莢ができる」と空っぽということがないんです。」

ほかにも熱帯地方のマザー・リーフは、葉っぱの縁にあるギザギザから根や芽を生やし、『ハカラメ』とも呼ばれています。」

植物にとつて一番安心な生き方とも言えるのが、地下茎をもつこと。ヒルガオ、ワラビ、タケノコなど。「土の中に潜っていたら温度もそんなに変動しないし、地上で芽を出してうまいこと育つことができればそれでいい。」

「最近ツクシが少なくなってきた。ビルや道路の建設で土を掘り起こしてしまうからです。土ごと掘り起こされてしまったら、地下茎を生やしているでも生きていけません。」

植物は約4億年前から陸上にいて、人間が現れたのはたかだか何十〇百万年前。それなのに地球を自分たちの土地みたいにしていないか。私たちはここで箸を置き、目の前のニンジンやキャベツにも感謝の気持ちをつたえるべきかもしれない。

「植物は、水と二酸化炭素と太陽の光で、自分たちの食べ物をちゃんとつくり、本当にきれいな生き方をしてる。動物は食べ物や配偶者を探してうるうる動き回れるけど、もし植物が動いて、本気で逃げ回つたら、。私たち動物はいきていけないだろうねえ。」

おわり



レモンちゃんは手足の先が白い。畳の上を歩いていても、白足袋をはいているみたいで、上品に見える。花をいけていると、ときどき手元を覗きに来る。「レモンちゃんに指導してもらってるように見える」と櫻子がいう。たしかに庭の草木には造詣が深いかもしれないね。



檜扇 寒菊

仙溪

万葉集に「ぬばたま」の名前で詠まれている檜扇の実は、夏の終わり頃に緑色の莢がふくらみ、秋には茶色くなって割れると中から漆黒の種子が顔を出す。

今年はずらしく葉株ごと売られていたので、寒菊をとり合わせて、生花でいけてみた。



数日後に寒菊をはずして、胴の檜扇を留に使い、副の檜扇は花茎を撓めて副流しの動きのある花型にいかかえてみた。

少し大きい感じはするが、これから先、葉株で檜扇の実をいける機会が増えてほしいものである。





浜辺葡萄

櫻子

写真の団扇のような丸い葉はシーグレイプ。アメリカのフロリダ州南部から西インド諸島、南アメリカに分布する常緑小高木。海岸や砂丘に生えるので、和名をハマベドウという。芳香のある小さな白い花を咲かせ、葡萄に似た果実は濃赤色に熟し食用になるそうだ。

昔からこの葉はよくいけられてきた。祖父も両親もシーグレイプがあると目の色が変わっていた。

特に紅葉が綺麗で大きな木のままで鮮やかな色の花と取り合わせてきたのを覚えている。珍しくて固い丸葉だが、向きを工夫すれば花器と花との接点を上手く繋げて強くまとまる。

いけばなは何でもよいから足元を緑で隠してという発想にならないようにしたいと思う。安易に花器の口元に突っ込まれた葉を見てそう思う。とても大切な場所なのにと。

アンスリウムもピンクッションもありきたりな花で、すでに珍しいものではない。でも取り合わせや器や敷板でとても良い花となる。私にとっては良いか悪いかどちらかしかない花なので、よほど良い花に出会った時しか取り合わせしない。そんな想いもあって良いかな。

花材 アンスリウム(亜芋科)

ピンクッション(ヤマモガ

シ科)

シーグレイプ(蓼科)

花器 金属花器



独楽こまのような器 仙溪

花器棚の奥から、巨大な独楽がくるくると回転しているような器がでてきた。棚からぼた餅ではなく、瓢箪から駒でもなく、棚の奥から独楽である。いや、独楽のような器だ。持とうとすると、腰が抜けそうに重い。底は小さいけれど、水をいっぱいに入れると、かなり安定のいい器である。

ちようどこの器がでてきた時に、花屋でアダンの実を見つけた。アダンの実はめったに花屋で売られていない。たまたま売られていたので、独楽のような器に付けてみた。

アダンの実も腕が折れそうなくらい重たい。腰が抜けそうな器だから、腕が折れそうなアダンの実も、すんなりとおさまってくれた。こんなに底が小さいのにだ。器と花の相性とはなかなか面白い。

黒に近いほど濃い緑色のアンズリウムの葉と、華やいだ色彩の赤紫色のバンダで、南国のとり合わせにした。

アダン（阿壇）は蝟の木科の常緑小高木で、亜熱帯から熱帯の海岸近くに群生する。葉にはすどい棘がある。

花材 アダン（蝟の木科）

バンダ（蘭科）

アンズリウムの葉

花器 陶扁壺



落ちない実

櫻子

秋になると色んな実をいけるが、赤い実で特に好きなものは、梅もどきや七竈、ガマズミだ。

日本には十五種類ほどのガマズミがある(ガマズミ、ミヤマガマズミ、コバノガマズミなど)。葉は丸葉で実より遅く紅葉するものもある。

梅もどきのように小葉を全部取り去ってから出荷される実も多いが、ガマズミは虫食い葉も残っていて、それが素朴で可愛らしく実の赤さを一層引き立ててくれる。

山では二メートル位の低い木なので日頃は目立たないが、実の季節には見つける事が出来る。

ガマズミで果実酒を作ると赤いお酒になるらしい。昔から天然の着色料としても使われてきたくらい、赤い実の色は鮮やかで透明感がある。

ガマズミの語源は嘯み酢実とか神ツ実(神の実)が転化したものと言われる。古くから日本の山に育っていて、寒くなると甘みを増す甘酸っぱい実で豊かな山の幸であったのだろう。

いけていても、実は落ちないし、甘くなるまではしっかりと実のつていてくれた。そんな力強い実りに上品な糸菊を添えた。

花材 莢迷の実(さいかすの)
糸菊(さいく)(菊科)

花器 濃紫色陶花瓶

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2013年
12月号
No.606

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





冷たい風

仙溪

中庭の山茶花がいつのまにか枝いっぱい咲いて目を楽しませてくれている。

寒い季節がやってきた。父が亡くなった一年。振り返ると多くのことが頭をよぎる。けれども、去年は二度訪れた東北も、今年は一度も行かなかった。東北の冬は長く厳しい。

毎日お風呂に入れて、温かな食事ができることを幸せに思う。できれば来年はまた仲間と行ってきたい。花は人の気持ちに優しく寄り添ってくれる。

畑を耕し、収穫して暮らしの糧を得る。漁をしたり、ものを作ったり売ったりして私たちは生きてきた。そんな素朴な営みができなくなってしまった人が増えている。

原発事故はあるはずのないことだった。日本には54もの原発があり、ほとんどが都会から遠く離れたところにつくられ、都市も地方もその現状に甘んじている。人の欲が生んだ金融危機の影響も大きい。世界各地の紛争も絶えない。

個人ではどうしようもない大きな流れに、知らぬ間に押し流されようとしている気がする。しっかりと足を地に着けて、自分で考えることをしないと、おかしなところへ連れて行かれていくことすら気づけない。

温かな部屋にいても、冷たい風の、あのつらさ痛さを想像して、自分のできることをしていきたい。



漆器の鉢にいける

△表紙の花▽ 櫻子

塗りの器に花をいけると、あらたまつた感じになる。作例の大鉢は果物を盛ったりして使っているが、水仙や椿との相性がいい。梅擬の赤い実もよく映る。

花材 梅擬(綱の木科)

水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

花器 溜塗大鉢

赤い釉葉の花器

△2頁の花▽ 櫻子

焼き物の赤色は出しにくい色だそう。金を使うこともあるそうで、そうするととても高価なものになる。でもどうしても赤い器にいけない時がある。この器は無理を言ってつくってもらったものだ。

花材 月桃の実(生姜科)

薔薇二色(薔薇科)

花器 赤色釉陶花器

白と黒の器

△3頁の花▽ 仙溪

家には白と黒の花器がいくつかあるが、どれもモダンな感じのいけばなになる。作例の木瓜と椿を備前焼にいけたら素朴な印象になるが、この器だと粋な感じがする。

花材 木瓜(薔薇科)

白椿(椿科)

花器 陶花器(竹内眞三郎作)



除真のきしん 松の立花

仙溪

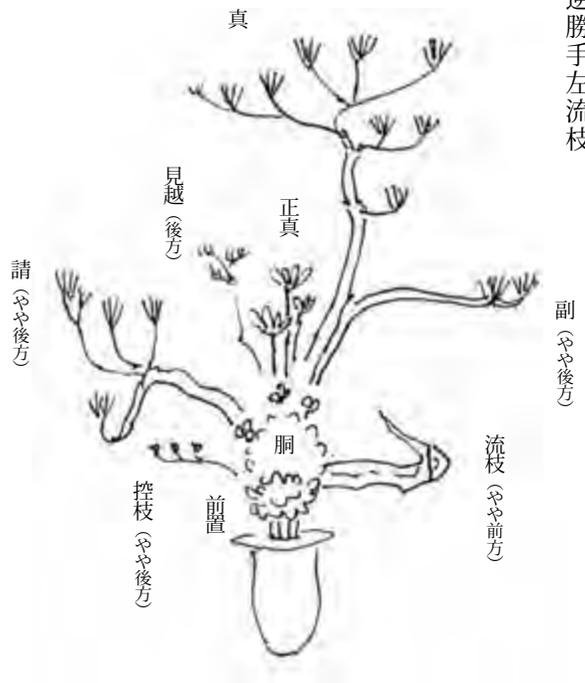
日本いけばな芸術九州展に松の立花を出品したので、会期終了後持ち帰って数日後に撮影した。一部いけかえているが、松や躑躅は京都と福岡を新幹線で往復したことになる。長旅ご苦労様だったが、福岡でも京都の家でも、多くの人に見てもらえたことが嬉しい。

松は古い葉を掃除すれば、付け枝でも勢いは保たれる。時々霧を吹くことで緑も褪せにくい。特に立花で松を扱う場合は、古い葉の掃除に時間をかける。指先が松ヤニで真っ黒になるが、全体に引き締まった印象になり、枝も生きてくる。

先月号では近松門左衛門の浄瑠璃に立花が扱われているを紹介したが、もっと以前に書かれた能や狂言の中にも立花（あるいは立て花）を題材にしたお話はすでにある。能の「半蒔」や狂言の「真奪」がそれで、「半蒔」には立花供養が、「真奪」には立花の真の松を探しに出かける場面が描かれている。どのような内容かは次号で紹介してみたい。

松の立花を立てていると、流祖の活躍した江戸時代前期や、能・狂言の書かれた室町時代と今とが、ちゃんと繋がっていると感ずる。古典花はもちろんのこと、盛花・投入にも古の精神は受け継がれている。そんなことを思いながらいけている。

逆勝手左流枝



花型 行型 逆勝手左流枝
 花器 天女模様銅花瓶
 花材 真・副・請・・・松
 正真・・・菊
 見越・・・檜
 流枝・・・晒木

控枝・胴・・・躑躅
 前置・・・栢植 (花展では松)
 写真では奥行きがわかりにくいので、花展出品作の斜め横からの写真を参考に掲載しております。



レモンちゃん
 食卓の窓側にはガラス花瓶に残り花を短くいけている。ガラス器だと水をいつも綺麗にしておかないといけない。時々レモンちゃんがその水を飲みに来て、そのまま外を眺めている。日射しに白い毛が眩しいね。

西洋館に秋を彩る
桑原専慶流関東支部いけばな展



ウエルカムいけばな

心地よい空間

あなたは何のために花をいけるのか。と問われたら何と答えますか。「自分の美の世界をいけばなで表現したい」

「いけた花が新たな命をふきこまれて輝いてくれるのが好き」

「とにかく花をいけると心がおちつき、豊かな気持ちになれる」

ただ花をいけるということにも、人それぞれに色んな思いがある。

また、「今日はお客様がこられる



から、花屋さんで花を買っていけておこうかしら」というような素朴な気持ちで花をいけることもあるだろう。訪れたお宅に花がいけてあると、やはり嬉しい。大切にいけられた花からご主人のもてなしの気持ちが伝わってくるし、なによりもその部屋にいるのが心地よい。

以前、フランス北部のノルマンディーに大きな風景式庭園を持つ貴族のお宅にお邪魔したことがある。その時通された居間に、庭から切ってきたコブシの大きな枝がそのままの姿で壺にいけられてあった。アールドゴ調の大きな明かり窓からさす

光と、無数のコブシの白い花が強く印象に残っている。

花がいけてあることで、その場がとても居心地のいい空間になる。別の言い方をすれば、花がいけられていることで、その場に心地よく迎えられるような気持ちにさせてくれる。それこそいけばなの大きな魅力の一つだと思うのだ。



関東支部の皆さんと横浜山手にある西洋館を花で飾る催しは、今回で4回目になる。横浜の佐藤慶真先生がいつもボランティアで花を飾ってこられたご縁で、2日間の花会をさせていたかった。従来のいけばな展ではなく、あくまでも来館者を迎える花として。

今回お世話になったのは「外交官の家」と呼ばれる洋館。ニューヨーク総領事やトルコ特命全権大使などをつとめた明治政府の外交官内田定槌氏の邸宅で、もとは東京渋谷の南平台に明治43年に建てられた。設計者はアメリカ人で立教学

校の教師として来日、その後建築家として活躍した「Z・ガーディナー」。京都の長楽館(旧村井別邸)もガーディナーの設計だ。

平成9年に横浜市は、内田定槌氏の孫からこの館の寄贈を受け、山手イタリア山庭園に移築復元し一般公開した。同年、国の重要文化財に指定されている。

驚かされるのは丁寧な復元だけでなく、室内の家具や調度類も再現されていることだ。聞くところによるとカーテン一つとっても、使われていたのと同じものを特別に京都の龍村織物でつくってもら

うほどの念の入れようだったそう
だ。まさに当時の外交官の暮らし
を体験できるように、との熱い思
いがこもっている。

特別な思いのこもった館内だか
らこそ、家具には「手を触れない
てください」という札が置かれて
いる。無料で一般公開されている
のだから当然だ。美意識の高い空
間ののちまで残すために、天

りげなく白いロールスクリーンを
下ろして廻り、強い日射しをやわ
らげるということもされている。

そんな館内に花が飾ってあると
「大事な建物だから、気をつけな
いと」という緊張感よりも、「外
交官の家に招かれた客人」という
気分になる。貴重な建物を鑑賞す
る、というような距離感ではなく、
「ようこそいらっしやいました！」
という温かな気持ちを感じる空間

に変わる。

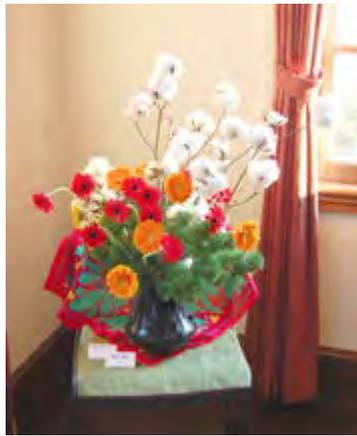


館内の花の場所を事前に出品者に
割り振って、それぞれの空間を意識
しながら器や敷物を考え、花をいけ

てもらった。独りよがりではなく、来
館者を意識しながらいけられた花
は、どの花も部屋に調和していた。
数種類の敷物を持ってこられて、雰
囲気に合うものを現場で選んだり、
90度どの方向からも見られるよう
にしたり。そのようにして、「よう
こそ」の気持ちがかめられたいけ
なはいけられていった。

今の世の中に「ウェルカムないけ
ば」が必要とされていると強く感じ
る。花と花の空間を意識して、花自
体が気持ちよく感じてくれるように
いけられたいけばなは、見る人も心
地よくしてくれる。そんな花のまわ
りでは、人と人も心地よい関係にな
れる気がする。

皆で心地よい空間をつくらう！
暮らしの中に、社会の中に、ウェ
ルカムいけばなを！





ワタノキ

仙溪

濃いワイン色のパフィオペディルムと綿の木を取り合わせてみた。意外な組み合わせだが、どちらも面白みがあり、質感もフワフワとツルツルで互いに補い合っている。ただ、緑がないので赤いスプレーバラを加えた。薔薇の赤色が、パフィオの赤みと相乗効果を発揮して暖かみのあるいけばなになっている。

数日後、パフィオが萎れたので湯上げて短くいけたところ、20日たった今も元気である。

花材 綿の木(苧科)

パフィオペディルム(蘭科)

スプレー薔薇(バラ科)

花器 舟形陶水盤



寒桜 〓10頁の花〓 仙溪

花型 草型 副流し
花器 陶花瓶

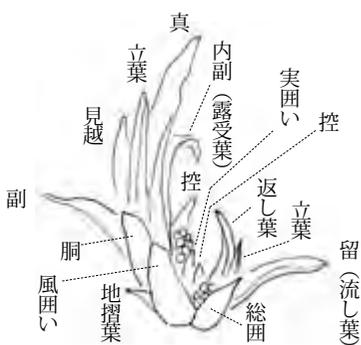
今年の寒桜は良い枝に恵まれた。比較的ねばりがあり、撓めやすい枝で、枝の縮まりもいい。ある程度の太さもあり、足元がほぼ真つ直ぐだった。ちなみにいけばなで寒桜と呼んでいるのは子福桜ではないかと思っ。

寒桜は晩秋から初冬の枯淡な生花の稽古に欠かせない。(薔薇科)

万年青 〓11頁の花〓 仙溪

花型 十五葉二果
花器 陶水盤

正月花の作例。常緑の葉と赤い実が新春を言祝ぐ。産地で葉の大小をバランス良く組み合わせて出荷される。生産者の技量がいけばな文化を支えている。(百合科)







出合い花 (3) 櫻子

サンバとポインセチア

サンバとは兵庫県で開発された新しいオリジナルの菊で「ひょうごサンバマム」という。2006年から品種改良が続けてこられた。

サンバのように華やかな洋種の菊で、踊る花びらということらしい。私が選んだのはウエディング・サンバ。白の一字菊といっても良いと思う。

京都の花屋さんには今年初デビュだ。他にもオータム・サンバやプリティ・サンバなどの色違いがある。

ネットをかけて売られているので、アナスタシアと同じようによく目立つ。特別扱いの花だが、糸菊や嵯峨菊のように日本的な菊と合わせるのは難しいと思う。

ポインセチアも園芸品種としては毎年ニューフェイスがお目見えする。

あれこれ悩んだ末に、アンティーク調のガラス器に短く並べてみた。どちらが主でも従でもなく、花の形の対比と色の対比がはっきりして、意外にいい感じ。新鮮な花型。クリスマス風の粉雪が舞う中で咲く二種の花。

花材 菊「ウエディング・サンバ」

(菊科)

ポインセチア (燈台草科)

花器 ガラスコンボート